

俺はお前の親父じゃねえ!! ?

星の海

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

麻帆良学園に一人の青年が転入して来た。その青年は自身のことを、少々容貌が変わっていて、少しばかり腕っ節が立つだけの一般人だと認識していた。

しかし、その青年の存在のあらゆる点は、麻帆良に住まう一部の者達にとって到底無視出来ないものであって……!??

これは一人の青年がある人物にそっくりであるばかりに学園生活を滅茶苦茶に狂わされ、募っていく誤解と疑いに多大な苦難を背負う話。

目次

|    |          |    |
|----|----------|----|
| 1話 | その青年の名は  | 1  |
| 2話 | その女の心情は  | 15 |
| 3話 | その青年の想いは | 32 |
| 閑話 | 母と子の想いは  | 47 |
| 4話 | 父と子?の関係は | 54 |
| 5話 | やらかした青年は | 64 |

## 1話 その青年の名は

「兄ちゃん、この時期に麻帆良学園まで行くって事は、もしかして入学生か転入生かい？」

市街地の中をゆっくりとした速度で走る一台のタクシー。その車内で中年の運転手が後部の青年に尋ねる。

「そうなんですよ、麻帆良学園の男子高等部に転入するんです」

青年は愛想良く答え、タクシーのフロントガラス越しに見える巨大な都市を一瞥し、感嘆の息を漏らす。

「それにしても、話には聞いてましたけどでっかいですねこの学園は」

「ははは、此処に初めて来る人は皆そう言うよ。何せ国内所か、世界最大の学園都市だ。つまり世界一大きな学校なんだから大きくて当然だろう？」

運転手の言葉に、そりやそうですね、と青年は笑って返す。

「しっかし兄ちゃん日本語上手いねえ、何処の国の人？」

「…あー、会った人皆に言われるんですけど、俺これもワンエイス：八分の一外国人の血を継いでいるって奴でして、ほぼ純粋に日本人なんですよ」

青年の言葉に、運転手は驚く。

「へえ〜！見た目はまるつきり外人さんだけどねえ、おまけに随分と男前だし、兄ちゃん女の子の子にモテるでしょう☒」

青年はニヤニヤしながら問うてくる運転手に苦笑して言葉を返す。

「育ちが随分と田舎の方でしょね、生憎婆ちゃん達にしか受けは良く無かったですよ。…俺の見た目はなんか、隔世遺伝だかなんだか難しい遺伝子学の現象で、爺さん辺りの血が濃く受け継がれてるらしいですよ」

「ふうん、化学やら何やらは学の無え俺にはわからんけど、人間ってのは不思議なもんだねえ。……つと、兄ちゃん、そろそろ着くぜ、降りる用意をしときな」

運転手に促され窓の外を見ると、確かに麻帆良学園の巨大な門戸がすぐ目の前に見えていた。

「じゃあな兄ちゃん、転校先でもしっかりやんな！外に出る機会があつたら今後もウチの会社をよろしくな!!？」

「ははっ！しがない学生ですからそうそうタクシー移動なんて真似出来そうに無いですけど、そうですね、使う機会があつたらおじさん指名させて貰いますよ！」

青年は運転手の言葉にこやかに返事を返し、大きめのキャリーバッグを転がしながら歩き去る。

「…にしても男前な兄ちゃんだったなあ。あんだだけ色白で赤毛混じりって事は、イギリスとかドイツの方が御先祖様なのかねえ？」

「…やべえ、迷った……………」

三十分後、何処を見渡しても女、女、女が犇いている麻帆良学園女子中等部の朝の通学路中央で、青年は途方に暮れていた。

道なりに点在していた案内図に忠実に従って青年は歩いて来たのだが、ある程度進んだ所で丁度生徒達の通学時間帯とかち合い、人混みに流されて案内図を見失った。新たな道標を探している内にどうやら女子校の方面へ来てしまったらしい。

…うわあめっちゃ見られてんだけど、本気でヤバイぞ警備員とか呼ばれたりしねえよな……………!!？」

青年は自意識過剰でなく左右前後の女子達から視線を集めているのを感じ、冷や汗を頬に感じながら足早に歩く。

「…わ、見て見てあの、スツゴイイケメンじゃない？」

「え、どれどれ?…きゃーっホントだ!!?何なに、外国人!?!？」

…実際の所は青年が視線を集めている理由は、『なんでこんな所に男子が?』的なそれよりも『凄く格好良い男子が歩いてる』というあの種の熱が籠ったものが多かったのだが、山育ちで他人の視線に鈍感

な所のある青年はそれに気付かない。

「…こうなったら最悪自分から詰め所にも出頭して素直に道聞いた方がいいか……?」

青年が後ろ向きに前向きな決意を固め始めた時、青年の暫し前方でどよめきのようなものが上ががる。

「…?何だ……つておい!」

青年は驚愕する。青年の視線の先には、スーツを着た赤毛の少年が何者かの両手によつて首を掴まれ、宙吊りにされていたのだ。俗に言うネットクハンギングツリーの構図である。

「おい!!?誰だか知らねえがガキ相手になんてこととしてやがんだ!!」

青年は女子の人垣を掻き分け、少年と下手人の下まで到達すると、少年を締め上げているツインテールの勝ち気そうな少女の腕を掴む。

「つ!??誰よあんた、気安く触らないでよ放しなさい!!?」

「巫山戯んな放すのはお前だよ!いいとこ小学生位のガキになに晒してんだ!!?」

少女は腕を掴んだ青年を睨み付け、鋭く言葉を放つが青年は怯まず言い返す。

「あなたには関係無いでしょ!??このガキはあたしに凄く失礼なこと言つたのよ!!?」

「だからなんだよお前の言う通りまだガキだろうが!!?こん位の子どもが歳上に生意気な口訊くなんざ珍しいことじゃ無えよ!!?お前見たとこ中高生だろ、ムキになつて恥ずかしく無えのか!」

「…明日菜く、このお兄さんの言う通り、ちよつとやり過ぎやと思うでく。悪気があつて言うたんや無いやろし、放してあげえやく?」

「う……木乃香……」

言い争う両者に割り込み、ふわりとした口調で少女——明日菜に声を掛ける木乃香と呼ばれる少女。明日菜は友人の諫めによやく頭に昇っていた血が下がり始めたのか、気まずそうに言葉を濁す。

「げほつ、げほつ……!!?」

「悪口言われたんならしつかり言つて謝らせつから、とにかくその手

放せ。こんな首も据わり切って無いガキにこんな真似続けてると最悪の骨が折れるぞ」

ぶら下げられたまま苦しそうに咳き込むネギを見て気遣わし気に青年が明日菜に告げる。

「わ、わかったわよ…確かにやり過ぎたわ、あたしも…」

明日菜は頷き、そっと少年の体を地面に降ろす。

「っ、はあ!!?…げほっげほっ!!?」

「大丈夫かガキ? 落ち着いてゆっくり息を吸え。返事しないでいいぞ」

ようやく気道が確保され、激しく咳き込む少年の背中を摩りながら青年が言い含める。

「…明日菜」

「わ、悪かったわよ。ちよつと頭に血が昇って…!!」

「ウチや無くてあの子に謝らなあかんで?」

少年の様子を見て、僅かに声に咎めるものを混せて名を呼ぶ木乃香にバツが悪そうに返す明日菜。

「収まったか? 首に変な感じは無いか、ガ…!」

「…:は、はい。大丈夫です。どなたか知りませんが、ありがと…!」

暫しの間を置いて、咳の止まった少年に青年が呼び掛け…:ようとして言葉の途中で固まり、少年もまた介抱してくれた青年に礼を述べようとして、言葉の最中に硬直する。

「…:あれ、よう見たらこつちのお兄さん、この子にそっくりやなあ…:」  
「え、もしかして兄弟かなんか?!?…:あー、そりゃ怒るわよね…:ごめんなさい」

そう、少年と青年は赤毛に混じった黒髪といい、顔の造りといい、まるで兄弟か何かの様に似通っていた。

…:え…:…:誰これ、縮んだ俺…:…:

固まっている青年の顔を呆然と見上げていた少年の両眼にジワリと涙が浮かび上がる。





も大分伸びちやいましたから解らないだけですよね、僕は貴方の息子です!!?」

悲痛なものさえ籠ったネギの呼び掛けに青年は流石に逃げるのを止め、改めてネギの顔を見てきっかり十三秒間思考して、

「やつぱり知らん!!?誰だお前は!」

…矢張り青年に心当たりは無かった。

「そ、そんな……!」

ネギは遂に両眼から涙を零し始める。青年としても罪悪感バリバリだが知らないものを知っていると言う訳にもいかない。

「ちよつとアンタ!!?どんな事情があるのか知らないけどこんなガキ泣かせてまで変な誤魔化しする事無いでしょ!?可哀想じゃないこんな悲しんでるのに!!?」

泣いているネギを見て明日菜が怒気を露わに青年に詰め寄る。

「誤魔化してねーよ!!?本気で知らねえんだよこのガキのこと!!?」

「はあ!?何いってんのよ!!?どっからどう見ても兄弟か親子じゃない!!?」

「あーそうだな逆の立場なら俺もそう言うなあ!!?でも俺はこんなガキ知らん!!?これは嘘でも何でもない、真実だ!!?大体このガキに何らかの関係があるって認めるつもりが無いならわざわざ助けに入る訳無えだろ!!?」

「……それは……じゃあ何でそっくりな顔してんのよあんたらは!」

「俺が聞きてえよ!」

青年は全力で叫び返す。周りを見れば泣いているネギの様子と青年の言動から段々と女子達の青年を見る目が険しくなっている。逃げ出そうにもこの状況を放っておいたら次の日の朝には確実に実の子を認知せずに捨て去った無責任ヤンキーパパ辺りのレットテルを青年は張られている事だろう。八方塞がりとはこの事だ。

…何だよこの状況は、何がどうしてどうなってるんだ……?」

青年が自身のキャパシティを越えた事態に少し泣きそうになっていると、そこに新たなる火種が投下される。

「はくなんやよう解らん展開やなあ……あや？高畑先生や。騒ぎ聞きつけて来たんかなあ？」

「え、高畑先生!?!」

……今度はなんだ………?

向かい合っていた明日菜が慌てふためき明後日の方向へ向き直ったのを見て青年がそちらへ顔を向けると其処には三十過ぎから四十手前の眼鏡に無精髭を生やした男性が人垣をかき分け近づいて来る所だった。

「一体なんの騒ぎだい？もうじき完全登校時間を過ぎるよ君達」

「た、高畑先生!!?これは、あの、ちよつとしたトラブルで……!!?」

「明日菜君！これはどういう……」

明日菜の側に辿り着いた男性――高畑は自らの生徒である明日菜の姿を見て目を見開き、事情を尋ねようとしながら青年の方を見て――

「っな!?!」

見開いていた目を丸くする段階まで更に開き、驚愕の声を上げて硬直する。

……おん?なんだこの反応は?………

「た、高畑先生?」

「……っは!?!」

青年が嫌な予感を膨らませていると、明日菜の声で我に返った高畑が、猛然と青年に距離を詰め、両肩を掴みながら激しい口調で問い掛ける。

「ナギ!?ナギですよね!!?こんな所で何をしているんです!?!」

………増えたあああああ!?!

青年が内心で絶叫している間に話はどんどんと進んで行く。

「た、高畑先生のお知り合いですか、この人!?!」

「い、いや明日菜君、知り合いというか……」

「タカミチく〜!!?」

「ネギ君!?!、こ、この人は……」

「う、うん！父さんなんだ!!?」

「っ!!? 違う!!? さつきから言ってるんだろガキ、俺はお前なんざ知らん!!?」

「な!? 何を言ってるんです、ナギ!!? ネギ君ですよ、貴方の息子です!!?」

「なんなんだよおっさんそもそも俺はアンタのことも知らねえぞ!!? なんだこれ集団ドッキリか!? 転校初日の俺に対してフリがキツ過ぎだろ!?!」

「何を言ってる…ネギ君、一体これはどういう状況なんだ!?!」

「ヒック…ここで父さんにたまたま会って、僕が息子だと言ったんだ…でも、父さんが僕なんて知らないって…! うわあああん…!!?」

「ね、ネギ君!!?…ナギ! 幾ら何でも言ってるいい事と悪い事がありますよ!!? ネギ君はずつと貴方を探していたんです!!?」

「待てやおっさん!!? 勝手に俺がそいつの親父だと決めつけんな!!? 俺はそんなガキ見たこと無えし何処かの女に子供産ませた覚えも無え! 従って他人の空似だ人違いだよ人違い!!?」

「な、ナギ…訳のわからない意地を張ってないでネギ君を抱き締めてやって下さい! やつと出会えた父子でしょう!!?」

「会話をしてくれよ頼むから!!? 知らねえつつつてんだろ!?!」

「ヒグッ…! タカミチ、どうしたら…?!」

「と、兎に角場所を移そう、大分騒ぎになってしまってる!!? ナギ、来て下さい!!?」

「あ、あの、高畑先生!?!」

「すまない明日菜君、授業には遅れてしまうかもしれない!!? これは絶対に何とかしなきゃいけない問題なんだ!!?」

「うおおお放せおっさん!?! 俺はこれから転校先の職員に挨拶に行かなきゃなんねえんだよ!!?」

「まだ言いますか!!? こっちは積もる話が山程あるんです、何処に雲隠れしていたか知りませんが絶対に逃がしませんよ!!?」

「痛でででで!!? どんな馬鹿力してんだアンタ、ギヤアア誰かあー」

「と、父さん、大丈夫ですか!?!」

万力の様な力で二の腕を締め付けられ、痛みに悲鳴を上げる青年にネギが心配そうに声を掛ける、が、青年はガバリと顔を上げ、あらん限りの大声でネギに向かって言い放った。

「俺はお前の親父じゃねえ!!?」

「…何だったのかしら、あの親子……?」

「ん〜ようわからんけど、後で高畑先生から事情聞いたらええんちゃう?」

「……学園長、これは確かに……」

「う、うむ。……しかしのお……」

チラチラと青年の方へ視線を寄越す高畑及び、人間ではあり得ない後部に発達した頭部を持つ異形の妖怪…もとい、麻帆良学園学園長、近衛 近右衛門。その傍らには戸惑った表情のネギが控え、矢張り青年に視線を向けている。

そして室内の人間の視線を一身に受ける青年は、産まれ落ちて此の方此れ程腹が立ったことはありませんと顔に書いてある、有り体に言ってキレる寸前の顔をしていた。

「……それで、人違いだったのはお解り頂けましたでしょうかねえ御二方……?」

ビキビキと額に浮かんだ青筋を蠢かせつつ青年は低い声で問い掛ける。

「…う、うむ。転入届けもしかと学校で受理されているようじゃし、君が持ち込んだ身分証明書や手続き上の書類も本物と確認が取れたわい。…どうやら君は本当に只の転校生、のようじゃな」

「寧ろ只者じゃ無い転校生ってどんな奴でしようねえ?」

ハツハツハと快活な声で笑う青年だがその目は一切笑っていない。「す、済まなかったね。言い訳になるが余りに知り合いと見た目がそっくりでね……」

高畑が今だ戸惑いながらも頭を下げる。

「…え、ええと、あの……すみませんでした……」  
隣にいたネギも謝るが、こちらは傍目にも酷く気落ちした様子である。

…連行される前の話からすりや生き別れの親父か何かが俺にそつくり、つてことみたいなんだわなあ……

そんな事情を聞けば知らなかったとはいえ盛大な肩透かしを喰らわせてしまった事に罪悪感を抱くが、何せ実際に何の関係も無いのだからこればかりはどうしようもないことである。

「うむ、…それにしてものお……」

近右衛門が青年の顔をしげしげと眺めながら呆れた様な感心した様な唸り声を上げる。

「…そんなに似てますか？そこのガ…ネギ君、の親父さんとやらに？」  
青年は一先ず苛立ちを飲み込んで尋ねる。流石に一切責任が無いとはいえ、気落ちさせてしまった子どもの前で拗ねた様に何時迄も怒っているのもみっともないと考えたからである。

「似ているなんてもんじゃ無いのう。あいつを少し若くすればそのまま君の見た目と瓜二つじや。高畑君が間違えたのも無理は無いわい」  
ふむ、と近右衛門は顎髭を撫でながら思案して、

「……のうナギ？儂等にドツキリ喰らわせ様として今更引つ込みがつかんだけなら、怒りやせんからネタばらしせんか？」  
「違えつつつてんだろが爺い!」

酷く優しい気な笑みと共にそう宣う近右衛門に、とうとうキレた青年は目を剥いて叫んだ。

「…いや、本当に悪かったわい。じゃが、此方の混乱も解ってくれい。儂も資料を見比べるまで判別が付かなかつた位に君はこのネギ君の父親に似通っているのじゃ。無礼な真似を正当化するつもりは無いが、どうか許してくれんかのお……？」

「……いえ、解って頂ければいいんです。お互い水に流しましょう、この一件は」

素直に頭を下げる近右衛門に、流石に学園の最高権力者が謝っているのだからこれ以上は引つ張らず不問に処しようと、大人の判断を下す青年。

「そう言つて貰えると助かるわい。…麻帆良男子高等部にはこちらから話をつけておく、今日の所は寮でゆっくり休むといいじゃろう」

近右衛門は安堵した様に一つ息を吐き、迷惑をかけた詫びとして青年の面倒な手続きの省略にかかる。

「それはありがたいです。じゃ、私はこれで……」

ケチが付いた訳の分からない一連の出来事をさっさと忘れるべく、青年は足早に学園長室を後にする。

「あ、あのっ……………」

「ん？」

ネギの声が去り行く青年の背中に掛けられ、振り向く青年にネギは何事かを伝えようとして言葉に詰まる。そもそも自分の父に瓜二つだというこの青年に対して、明確に何が言いたいのかもネギには解っていないかった。

青年はそんなネギの姿に苦笑して、出口に向かっていた踵を返すとネギの元へ歩み寄り、ボスリと頭に手を置き、やや乱暴に撫でる。

「あっ……」

「…まあ、なんだ。成り行きとはいえお前さんには悪いことしたな、ぬか喜びさせて済まんかった。そっち側も強引に引つ張ってきた非があったってことで、お互い様にしてくれや」

「……、いえ、こちらこそ勘違いしてすみませんでした」

ネギは一瞬何かを堪える様に俯いたが、謝罪を述べる青年に対して顔を引き締め、言葉を返す。

青年は明らかに無理をしているネギの様子に顔を顰め、あー、と困った様に頭を掻きながらもネギに対して忠告をする。

「顔形の紛らわしい俺みたいなのに言われたくねえかもしれないねえがよ、まだ小せえのに誰とも知れねえ他人にまで気い使わねえでいんだぞ？人間出来てんのはそりゃ悪いことじゃ無えが、お前さんガツカリしたし、紛らわしいんだよこの野郎っ！つて腹が立ったろ？それはま

あ、俺の所為じや無えけど、お前はお前で怒る権利が有るんだ。ンなガキの頃から溜め込んで鬱屈としてつと、碌な大人になんねえぜ？」

差し当たっては後ろの瓢箪と眼鏡に八つ当たりでもしとけ、と、最後にネギの耳元で悪戯っぽい笑みを浮かべながら小さく呟き、青年はもう一度ネギの頭を撫でて学園長室を出て行った。

「……………」

ネギは青年に撫でられた己の頭にそつと手を触れ、閉じた扉を見つめる。

そんなネギの様子に、高畑と近右衛門は気不味そうに顔を見合わせ、やがて高畑が躊躇いがちに声を掛ける。

「…………ネギ君、大丈夫かい？」

「…………タカミチ…………うん…………」

振り返ったネギは二人が考える程に気落ちはしていない様子だったが、その代わりに眉を軽く顰め、虚空を捉えているかの様に焦点の合っていない瞳は、如何にも何事かを考え込んでいる様子だ。

「…何か、感じるものがあつたのかのう、ネギ君？」

「学園長先生……………はい……………」

近右衛門の穏やかな問い掛けに、ややあつてネギは頷いた。

「あの人が、あんまり父さんに似過ぎていたからかもしれないかもしれませんけれど……………前に、父さんに頭を撫でて貰った時のことを、思い出したんです……………なんだから……………」

ネギは柳眉を下げて表情を暗いものに変えながら、ポツリと呟いた。

「……………本当に、父さんに慰めて貰ってる、みたいでした……………」

「……………」

「……………ネギ君……………」

それきり押し黙るネギに、近右衛門も高畑も掛ける言葉が見つからず、学園長室内を沈黙が支配した。

「……………学園長、彼は本当に……………」

「……………うむ……………」

高畑の問いは端的に過ぎるものだったが、近右衛門は意思を汲み取り、重々しく頷く。

「彼に関する資料は彼自身が持ち込んだ身分証や、事前に学校に送付されていた身体歴等のものだけじゃ。人をやって調べさせてはいるが一般人、と見るのが妥当じゃろうなあ……潜入や騙りが目的ならば化けてもあんな態度は取らんじやろう」

「……ですね……」

高畑も暫し考えた後に首肯する。何かを企んでいるにしては、青年の言動は余りにも非効率にして支離滅裂である。また海千山千の老獪さを備える近右衛門や高畑から見ても、青年の様子は極めて自然体のそれだ。論理的に考えるのならば、青年は極めてナギ・スプリングフィールドに容姿が似通っているだけの一般人なのだろう。

「……：兔に角高畑君、彼の調査結果は追って伝えるわい。君は当初の予定通り、ネギ君を案内してやってくれるかのう？」

「……解りました。ネギ君」

近右衛門の言葉に頷くと、高畑は沈んだ様子のネギに声を掛けて学園長室を後にする。

「では、学園長……」

「学園長先生、失礼します……」

「うむ」

扉の閉じる音を皮切りに、近右衛門は大きく息を吐いて椅子の背もたれに体重を預け、シミ一つ無い天井を見上げる。

「……しかしのう、これで関係を疑うなという方が無茶じゃろうが。何なんじゃあの男は……」

近右衛門は胡乱な眼差しで机の資料を摘み上げ、改めて目を通す。

「……麻帆良男子高等部、2ーAに転入、年齢は17……いかん、まさかとは思うがギリギリ辻褄が合わんでもない年齢じゃ……」

近右衛門はもう一度溜息を吐き、その名前を口にする。

「百歩譲って顔が激似なのはええとして、どう考えても狙つてるとし



か思えんじやろこの名は……顔が似とれば名前も似る訳が無かろう  
に」

「春園はるぞの 凧なぎつて、偶然とこれを捉えられるかい」

## 2話 その女の心情は

「……あーもうスツキリしねえな畜生っ!!?」

旅装の青年——春園はるぞの 凧なぎはその端整な細面を不機嫌そうに歪めて吐き捨てる様に悪態を吐いた。

モヤつく原因は無論、先の壮大な人違いによる連行によって無駄な時間を喰った事に関してだが、凧の腹の底に渦巻いているのは怒りよりも罪悪感、と表現すべきものの方が割合として多い。

…阿呆臭え、勝手にあつちが人違いして勝手に連れてって勝手に肩透かし喰らっただけじゃねえかよ。俺になんの落ち度が有るってんだ……

何とも人の良い己の心情を嗤う凧だが、己に非の無い事を再認識した所で一向に気分は晴れない。

「……ムシヤクシヤするぜ、ったく。熊でも狩りに行きてえな……」  
実家の山が恋しいぜ……と早くも遠い目をして郷愁の念を孕みながらカラコロとキャリーバックを引き摺る凧に対して、唐突に横合いから声が掛かった。

「ほおくくう……?ならストレス解消に付き合ってやろーか転校生」  
「あ?」

凧が声の方向に首を振ると、そこには裸足に空手着を着たオレンジ髪、後頭部を三つ編みにした男が不敵な笑みを湛えて腕を組み、桜の樹に寄り掛かった体勢で凧を見つめていた。

「……誰だてめえは?」

「俺か?俺は中村 達也。女の子と空手に人生を捧げているしがない武道家の一人よ。趣味は覗……ナンパとイケメンをボコることだな」

モロに不審者を見る目付きで胡乱気に問い掛けた凧に惚けた返事をしてから、中村はよっこらせと凭れていた背中を伸ばし、爽やかな笑顔と共に宣言した。

「うし、じゃあ闘るか」

「………何言つてんだお前………?」

色々過程を飛ばしまくっての中村の言に、凧の視線は不審者からキ

チガイを見るそれに変わった。

中村はそんな色んな意味で冷たい眼光にもめげず、というか気にせず、あつけらかんと言葉を放つ。

「なんだよ察しの悪い奴だなオイ……俺のライフワークは顔の良い野郎を半殺しにすることだってさつき言っただろが？」

「通り魔かよ!？」

凧は全力でツツコミを入れた。

「安心しろ、理由はそれだけじゃ無え……先程チラツと気になる噂を聴いたんだがな、なんでも赤毛の超イケメンが自分のガキを認知しねえとか何とか、そんな糞つたれた噂を小耳に挟んでよお……」

「その噂になってんのは確かに俺だが一から十まで誤解だよクソがあ!!？」

よく見れば目が全く笑っていない中村の語ったあんまりな話に凧は思わず絶叫した。

「トボけんじやねえヤリ捨て男があつ!!？望まぬ妊娠泣くのは女つ!!？何時だつて性の被害者として泣く羽目になんのは弱い女子供なんだよ！俺あ助平な自覚があるが強姦魔痴漢無責任野郎には人権を認めて無えんだよ覚悟しろオラア!!？」

「人の話を聞けや誤解だつて……!!？……畜生厄日だ!!？今確信したぞ今日は人生で一番の厄日だ糞つたれえええ!!？!!？」

踊り掛かって来た中村を何とか躲した後、ヤケクソ気味な叫び声を上げながら凧は全力で走り出す。

「誰かああああつ!!？火事だあああああつ!!？」

「他人を集める際の常套句叫んで逃げんなゴラア!!？皆さーん、性犯罪者が逃げてます逮捕にご協力をおおおお!!？」

キャリアバックを担いで脱兎の如く凧が走り出し、中村が怒号を上げて後を追うリアル鬼ごっこが幕を開けた。

「うらあああ、待ちやがれあああ!!？」

「待てと言われて待つ阿呆が居るわけ無えだろ阿呆があつ!!？」

全力で叫び返しながらも凧は歯噛みする。

……存外鍛えてやがる、俺が振り切れねえとはどういうスタミナしてんだあのヤンキー空手野郎……!!?」

凧は幼い頃から野山を駆けずり回って鍛えられた頭抜けて強靱な足腰とスタミナを持っており、どれ位強靱かと問われれば齡13にして山中、熊に至近距離で捕捉されてから普通に走って逃げおおせられる程度には人間離れた強靱さである。

更に成長を遂げた現在ならば、素の身体能力のみである程度障害物が有って入り組んだ地形でさえあればチーターからも逃げ切れると自負していたが、その健脚を持ってして頭の悪いチンピラのような外見をしている中村 達也という男を、凧は一向に振り切ることが出来なかった。

「逃、げ、て、ん、じゃ無えよヤンキーパパ野郎あつ!!?今から振り向かねえと後悔すんぞてめえああ!!?」

「んな見え見えの手に誰が引つかかるかボケエ!!?」

ほぼ全力疾走に近いペースで走り続けてもう五分以上になるというのに、息も切らしていない様子で怒号を飛ばして来る中村にこちらも元気に怒鳴り返し、戯けた台詞を一蹴する。

凧にした所でまだまだスタミナは余裕であり、何ならこのままあと一時間は走り続けても良い位である。兎に角詰まらない挑発に付き合わなければ追い付かれる心配は無さそうだと凧は判断し、その内何処かで速度を一気に上げて振り切る算段を立てつつ脚を繰り出す。

……このまま単純に直線軌道を走っても逃げ切れねえ、良い頃合いに市街地が見えて来たから適当な表街道から裏路地にでも……!!?

思考の途中、背後で生じた異様な気配に背筋が凍り付く様な危機感を覚えた凧は、速度が鈍るのを承知で首を後方に捻じ曲げ、後方の中村の姿を視界に捉える。

「……!!?……はあ!!?」

そして凧の表情が驚愕に歪み、その口から掠れた悲鳴が上がった。

「後悔するつつつたろが優男おつ!!?」

走りながら右手を開いて体軸の横に構える中村。その掌には光り輝くオーラの様な何か収束して、人の頭程もありそうな眩い光弾が生み出されていた。

中村は光弾を浮かべる右手を軽く後ろに引いて掌底打ちの要領で腕を振り抜き、高らかな叫びと共に光弾を矢のような速度で風目掛けて撃ち出した。

「裂空掌れつくうしょうっ!!?」

大気を裂き、風を孕みながら光弾が風へと迫る。

「ちよ、オイ待て待て待て待てえっ!」

風は迫り来る光弾を前に、最早形振り構わぬ全力疾走に速度を切り替え、キャリーバックを放り捨てつつ悲鳴を上げた。

……なんだこりゃあ!?!明らかに当たったら、唯で済まなそうな……  
「代物を他人にぶっ放してんじや無えよ通り魔野郎おおおっ!!?」  
!!?」

思考の後半を全力の怒喝として口から放ちつつ風は思い切り斜め前方に跳躍し、その身を投げ出した。

それは着地はおろか受身すらも考慮せず、ただ己が身体が振り絞れる全力を用いてその身を宙に投げ出す捨て身のダイブ。またの名を米国アクシヨン映画式大跳躍ハクリッソンド映画式大跳躍という。

下手な保身を考えない全力回避が功を奏してか、ほぼ不意打ちに近い形で放たれた光弾は風の腰元ギリギリを服に掠めたのみで前方へ抜け、直後に風はアスファルトの大地に勢いを付けたボディプレスを仕掛ける羽目になった。

「ぐええっ!!?」

咄嗟に顔だけは腕で庇ったものの腹と胸を同時に強く打ち、風は潰れた蛙の様な悲鳴を上げる。が、直後に風は両手両足を地面に叩き付けて跳ね起き、一瞬の停滞も無く疾走を再開した。

「っ!おのれ猪口才な!!?」

「づるぜえボゲ!!?」

光弾を直撃させて打ち倒すか、躲してスピードの落ちた所を捕まえるつもりだったらしい中村は眦を一層吊り上げて憎々し気に吐き捨

て、負けじと凧は衝撃に濁った声で叫び返した。

「つつ〜!!?、あゝあゝクソ痛つてえっ!!?!!?てめえよくもあんな得体の知れねえ!!?」

身体の前面からじわじわと沸き上がって来る激痛を叫んで紛わし、物騒なものを撃ってきた中村へ凧が怒りと共に文句を叩き付けようとした瞬間、何かが爆発した様な破砕音が前方から鳴り響き、凧は思わず走りながら後ろに捻じ曲げていた首を前に向け直して、音のした方を見やる。

すると、人一人が潜り抜けられそうな程の大穴からもうもうと粉塵を上げる、何かの倉庫とおぼしき建物の一面であるコンクリ壁の惨状が凧の目に飛び込んで来た。

「……………つつ……………!!?」

洒落になつていないにも程がある破壊跡を半ば呆然と横目に見ながら走り抜け、我に返って声にならない悲鳴を上げた凧は勢いよく首を再び後方に向けて中村へ怒号を上げる。

「てめえは俺を殺す気か!?!なんてもん飛ばして来やがんだクソ野郎!!?!!?」

「五月蠅えカスが!!?大人しく俺様の制裁を受けねえからだよタコ、貴様が鳴かせた……………もとい泣かせた女に懺悔の言葉を残してハイクを詠めやあ!!?」

「だから違えて言つてんだろが!?!俺は単にその噂のガキの親父に顔が瓜二つなだけのしがない学生だボゲ!!?大体あのガキヤ小学生半ば位だろ、ンなでけえガキが高2の俺に居るわきや無ーだろ!!?」

「ああ!!?そんなんでめえが歳誤魔化してるかてめえが自分の息子よりも幼い時期から女襲つてやがったのかのどっちかだろうがこの外道があ!!?」

「なんでそうなんだよ!?!」

「五月蠅え沈めや裂空掌れつくうしょうおあ!!?」

「危ねえ!?!てんめ……………!!?!!?…逃げきつたら覚えてやがれよ必ず警察に突き出してやんぞ脳足らずがあ!!?」

ギヤアギヤアと互いを罵り合いながら二人は麻帆良のシンボル、

青々とした枝葉を繁らせ、都市の一角にてその巨体を雄大に見せ付けている、樹高100m越えの巨木。通称世界樹の方角へと高速で移動して行く。

そうして街を駆け、森を抜け、川を越えて。巨大なる樹木の、まるで小山が連なっている様に張り出した根の元へ二人が辿り着いた時には、既に逃走劇リアル鬼ごっこが開始してから2時間近くが経過していた。

「はあーっ、はあーっ、……っはあっ!!?…糞が、マジで、しつこいぞてめえ……………!!?」

「ぜえ…ぜえ……………!……………へっ、てめえの、往生際の悪さには、負けるっての……………!!?」

優に十数kmの距離を争いながら全力疾走して来た二人は、流石に息も絶え絶えな様子で足を止め、5m程の距離を置いて睨み合っていた。

「まあ、いい。あてめえも観念したみてえだしなあ!!?安心しやがれ、肋骨全損して1、2ヶ月病院のベッドで呻くだけで勘弁してやらあ」  
「人は、それを半殺しと呼ぶんだよ…どこら辺を勘弁してんだ脳足らず。……生憎だなオイ、どうやっても振り切れねえみたいだしてめえはやり過ぎだし、いい加減堪忍袋も限界なんですよ…遅まきに過ぎるがてめえの喧嘩買ってやんよ。記念すべき転校初日からミテラとの約束破らせやがって、てめえ前歯で済むと思うんじゃないぞオラ」

あゝあゝ!?!と完全に喧嘩上級者の如きメンチ切りと共に風は指をバキボキと鳴らしながら中村に向かって一歩踏み出した。

「ああ〜ん?遂に開き直りやがったか精巢爆裂男が。上等だゴラそこまで言うならきっちり砂にしてやるわ覚悟しろや」

中村は燃える義憤と燃え盛る嫉妬を胸に、目の前の嫌みな程に整った顔をしている優男に向かい拳を構えた。

麻帆良に一定数生息している、良い歳をして世界最強とかその道の頂点とかを目指している少しばかり時代錯誤な生き方をしているBUDOUKAという生き物の一人、中村 達也が早朝鍛錬後の日課で

ある岩砕きを終えて、刻一刻と迫る完全登校時間など気にもせず悠々と学校へ向かう途中、道行く女子達の姦しいお喋りを聞くとも無しに聞いている内にある非常に不愉快な話を知った。

それはとある男が偶然実の子に再会した事に端を発するらしい。自分にきちんと父として接してくれ、自分を息子と認めてくれ、という年端もいかない息子の涙ながらな訴えを素気無く拒否し、俺はお前の親父じゃ無え!!?などと関係性を全否定したのだという。

中村は怒った。それはもう大層に怒った。話を聞く限りでは、そのあまりな非道っぷりに憤った麻帆良の広域指導員である高畑・T・タカミチ教員、通称死の眼鏡デスメガネによって男は連行されたいが、中村の怒りは収まらない。男は息子の母親に対しては完全に遊びであり、子供が出来たと知った途端に蒸発した。その後心労から病に倒れた母を救う為にその息子は父を探して方々を彷徨い歩いたのだという。

中村 達也は女が好きだ。もっと言うなら女の子とのチョメチョメに興味津々な思春期のリビドーを持って余す健全なエロ男だ。故にこそ学生たるもの節度ある清き付き合いを、なんてお堅い口上など糞食らえと思っているし、それについて自分の衝動を恥ずかしい等と思ってもいない。

しかし、そんな自由恋愛風潮は野郎の方に責任を取る覚悟と能力があつてこそだとも、同時に中村は考えるのだ。愛の無いS〇Xを否定する訳でも無いが、そうで無いなら羽目を外すのは良いとして、出来たと言われて身に覚えがあるのならウダウダ言わずに覚悟を決めろと彼は常々思っていた。

故に中村は、『そうだ、糞野郎を殴りに行こう』と、旅行に行く様なノリで尻に喧嘩を売ったのだ。

そして人伝てに行き先を尋ね、学園長室のある校舎の周辺で待ち伏せ実際に遭遇してみれば、非常に稀に見るレベルのイケメンだとは聞いていたが成る程、なんだかんだで顔面偏差値の非常に高いこの麻帆良学園都市においても頭一つ抜けた超の付くイケメンであり、これならば弄ばれる女が居てもむべなるかなという感じだ。

……なれば制裁を加えねばなるまい!!?泣いた女達の恨みを晴ら



す為、これから泣かされる女を作らぬ為、愛されぬ子供の無念を救う為、そして全世界の非モテ男子の怒りの代弁の為、何よりも俺自身のイケメンに対する嫉妬を解消する為にいっ……………!!?」

中村は義憤4割、私怨6割の比率で怒りに対して燃料を焼べ、正義は我にあり（と、いうことにして）生き生きと距離を詰めに掛かる。

……………こいつはかなり鍛えてるみてえだが、俺の放った気弾になんたそりゃあ的なリアクションして驚いてやがったから、気が発現するまで行つてねえか出来ても無意識的にしか気を使えてねえ、つて理屈にならあな。んな若葉マークの初心者恐るるに足りんわ!!?」

……………

気とは、人が厳しく己の肉体を鍛え上げることによって発現する、『オーラ』や『ストラ』等の別名で呼ばれる超常的な力であり、その存在が人体に与える影響は凄まじい、の一言に尽きる。

それは全身の骨や筋肉をより強<sup>つよ</sup>靱<sup>よく</sup>く、頑丈にし、時に全身の神経伝達物質すら操つて時間の流れを変えさせ、不壊の鎧、無形の刃と成り武具と成り得る。

中村が追跡劇の際に凧へ放つたのは、その気を弾丸の様に収束させて物理的破壊力を持たせ撃ち放つ、公には『遠当<sup>よ</sup>て』と呼称<sup>よ</sup>ばれる基本的な外気の運用法だ。

他にも中村は内気による身体強化をかなりのレベルで行える、真面に勝負をして負ける気は欠片もしていなかった。

そうして中村がジリジリと距離を詰め、一足跳びに襲い掛かれる間合いまで詰めに掛かるのを余所に、凧は肩幅に足を開いて垂らした両腕の肘を軽く曲げ、瞑想でもしている様な姿勢で目を軽く瞑る。

「……………あん……………」

目の前の中村を前にしてあまりに無防備なその動作に、中村が思わず疑問の声を洩らした、その時。

「……………リミッター、解除おっ!!?」

カツ!!?と目を見開いて凧が叫び、その全身が眩く輝くオーラの様な流動する光に覆われた。

「……………は？」

「死ねオラ」

予想外の事態に目を点にした中村の眼前に、次の瞬間風が放った飛び蹴りの靴底が映し出されていた。

風は全身に纏った光によって湧き上がる圧倒的な全能感に酔い痴れ、気分が高揚するのを感じる。

……………浸らない様にしねえとな……………

脳裏に浮かぶ母の様な姉の様な、自らが唯一慕う家族の心配気な表情を思い出し、風は暴走気味の感情を抑える。

これはとても危ない力だ。怒りに任せて振るえば待っているのは凄惨な結末だと風は理解している。

そう、簡単に人が殺せる力だと。

一つ頷いて感情に折り合いを付け、風は改めて目の前の中村を見据える。

ポカンと口を開けているその間抜けな面をまじまじと見た風の脳裏に、この2時間ばかりで中村から仕掛けられた数々の暴虐な仕打ちが甦った。

……………ああ、うん。やっぱ半殺し位にはしていいやな……………

あっさりと自制を取っ払った風は、五体から溢れ出る力を下半身に集約させ、腰の捻りと足の踏み込みだけで軽々と己が身体を高速で射出する。

空中で勢いを付けて前回りに一回転、回転の終わりに遠心力と身体の勢いを乗せた右脚を槍の様に打ち出す、空手で言う飛翔蹴り、理解り易く言うならばラ○ダーキックが中村の顔面に迫る。

「……………?!?!のあつ?!」

しかし中村は蹴りの顔面直撃寸前で我に返り、半身を退き左下方へ仰け反るようにして攻撃を回避した。

……………なんだ、口だけじゃ無くてマジに強えなこいつ……………

風は格別過剰に手を抜いたつもりも無い飛び蹴りを避けられた事

に少しばかり驚いた。驚きつつも、凧の折り畳まれていた逆脚が下方へ突き出される。

中村の頭上をすれ違い様にその顔面を踏み付け、足場として街道横の街路樹へ向けて凧は跳躍した。

「ぶげっ!？」

仰け反った体勢で上から顔面を踏み付けられた為に、潰れた蛙のような悲鳴を上げて地面に倒れる中村。

そんな中村を尻目に、凧は街路樹の幹に両脚で横向きに着地した。両脚を撓め一瞬重力を無視して静止、直後上体を斜め下方に降り身体全体を縦回転させながら街路樹を蹴り付け急速射出。倒れた中村に、飛び出した勢いと回転運動の全エネルギーが乗った縦3回転胴回し回転蹴りが真面に腹へ喰い込んだ。

「ぐ……はっ!？」

ミキリ、と肋骨<sup>ほね</sup>の軋む音を腹の中で響くのを感ずると同時に上がって来た激痛に、中村から苦痛の声上がる。

「ざまあ見晒せトサカ頭が、他人を噂だけで軽々に追い込む様な真似すつからこうなんだよ」

軽やかにトンボを切って着地を決めてから、凧は中指を突き立て中村に舌を出しながら言い捨てる。

「……上つ等だ糞イケメン、どうやら俺様としたことが見誤ってたみてえだなあ。気とは違ってみてえだがそこま動けんならまあ、関係無えやな……本気<sup>マジ</sup>で闘ったるわ」

ゆつくりと起き上がった中村はゴキリ、と首を鳴らし、据わった目付きでそう宣言して、再び構えを取った。

「タフだなオイ、熊の顔面に決めたら倒れるくれえの勢いで蹴りくれたんだがよ」

鬨る気満々に摺り足で距離を緩やかに詰めて来る中村が放つ鬨志に凧も憎々し気な笑みで応え、こちらは両腕をだらりと垂らした自然体で無造作に一步目を踏み込んだ。

「……………」

互いに言葉が途切れ、対照的に距離を詰める二人はあつという間に

互いを互いの間合いに捉える。

「死に晒せや女の敵があああ!!?」

「違えつつつてんだろがボケエ!!?」

凧がノーモーションから身を投げ出し気味に放った拳と中村が爆発した様な飛び込みから放った刻み突きが交差し、互いの顔面に突き刺さる。

そしてそれが長い喧嘩の幕開けだった。

「痛つてえなチクシヨ、此処まで鬨りあつてバトルの原因がそもそも事実無根とか巫山戯んなよ、ったく……」

「だ・か・ら・俺は誤解だつて何べんも言つたらうがトリ頭が!!? 巫山戯んなはこつちの台詞だ糞が人生ン中でダントツの厄日だ今日はコンツクシヨアアアアア!!?」

「うおおおい! 悪かった、悪かったから此処であんまり騒がんでくれ頼むから! さっちゃん店の店出禁になったら俺あ絶望どころじゃ済まねえんだよ!!?」

青痣と裂傷と打撲痕で元の1, 2倍程に顔を腫れ上がらせた中村の戯けた言葉に凧が激昂して席を立ち夜空に向かって咆哮する。周りの厳つい御面相をした連中が一齐に凧と中村を睨み付け、中村はやや焦った様子で両手を合わせて頭を下げて凧を宥めに掛かる。

あれから騒ぎを聞いて駆け付けた広域指導員に止められるまで延々と半ば殺し合い地味な喧嘩を続けていた二人だが、漏れなく拘束されて広域指導員の詰め所に連行され、其処で学園側に連絡を取ることによつて中村の凧に対する誤解は綺麗さっぱり解けた。

メンゴメンゴと軽い様子で謝罪する中村に凧は再びブチ切れる寸前まで行つたものだが、なら晚饭好きなだけ奢つからチャラにしてくれや、との中村の提案に如何にか矛を収め、中村の知る1番美味くて

しかも安い店、との高評価を誇る屋台型中華料理店、超包子チャオパオズまでやって来て現在に至るのだった。

「いいか、言っとくが俺は死ぬ程食うからな、蒼ざめて泣き付いても金はビタ一文出さねえぞ」

「わざわざ断り入れる辺り面に似合わず律儀だねえお前。心配すんなこれでも本気に悪かったとは思ってんだ、お前は女の子じゃ無えから態度は良かねえけどケジメはしっかり付けるのよ俺」

こちらも絆創膏だらけの顔で睨みを利かせつつ凄む風にはらりと手を振って答える中村。

喧嘩をしたら親友等という熱血少年漫画的な理論を信ずる程二人は単純な訳でも無く、風の方はまだいつそ敵意を覚えている位だった。が、曲がりなりにも二人はここ数時間罵倒が大半とはいえ言葉を交わし、正面からやり合った。結果、何となくだが風は中村の人と成りが解った様な気になり、良くも悪くも単純なバカなのだ中村の性質氣質を理解した。

納得は出来ないただ水に流すのも癪ではあるが、普通に接していれば悪い奴では無いので、風はもういいか、と多少投げ遣りな気分で癩癩を抑え込んだ。

「駄目ですよ、此処は楽しく食事をして頂く為の場なんですから」

と、多少不貞腐れながらも風が中村と和解を果たしていると、小さく囁く様な、しかし不思議と耳にするりと入り込んで来る不思議な声音をしたコックコート姿のふくよかな少女が、軽く眉根を寄せて風と中村を叱る様に告げた。どうやら二人の元に料理を届けに来たらしい。

「いやーさっちゃん済まねえ！こいつ麻帆良に今日転校して来たばっからしくて暗黙のルールつてのにまだ疎いんだよ。紛らわしい話は他所でやつから、どうか出禁は勘弁してつかーさい!!?」

へへー!!?と中村が丸テーブルに額を擦り付けて迄の低姿勢で少女に謝る。風も主に自分が騒いでいた手前バツが悪くなり、少女に向かって頭を下げた。

「申し訳無い、以後気をつける」

「はい、お願いします」

軽く微笑んで少女―四葉 さつきはそう返すと、手際良くテーブルに料理を並べ終え、一礼して屋台に戻っていった。

「……あの子は？感じのいい娘だけど此処のバイトかなんかか？」

「お？てめえさつきちゃんに目え付けるとは中々解ってんじゃねえか。とはいえ止めとけ、多分ただ顔が良くても靡いちゃくれねえぜ超包子の料理長様は」

「そんなんじやねえよ……料理長？あの娘が？いいところ中学生位にか見えねえぞ」

したり顔で中村が吐く言葉の中に聞き捨てならないものがあり、風は顔を顰めて疑わし気に問い返す。

「嘘じゃ無えし中学生つてのも当たりだよ。あの歳で厨房を一手に仕切ってるから凄いなんじやねえかよさつきちゃんは。万人受けはないかもしれねえが十二分に可愛いしなあ」

スレンダーはスレンダーで良いがムチツとした娘も良いよなあ、とニヤつきながら呟く中村を風は半眼で見遣るが、しばらくして首を振り料理を取り分け始める。

「お前の好みはどうでもいい。んじや貰うぞ」

「ん、おお。さつきちゃんの激ウマ飯食って腰抜かすなよ？」

風は一心不乱に焼飯を掻き込み、青椒肉絲をせっせと口の中に放り込みんで、小籠包をハフハフと口の中を熱しながら頬張る。最早風は食欲の権化と化していた。

「本気に美味えなオイ！」

「だべや。偉大なるさつきちゃん大明神様の恩恵をその舌と胃袋でしかと受け止めやがれ」

ケケケと笑いながら油淋鶏を頬張る中村を前に、昼から何も食べていなかった風は三大欲求の一つが上質な食事によつて満たされていく幸福に、思わずホウ、と満足気な吐息を洩らす。

「…あーあれだ、今日は目の前の馬鹿面の襲撃を含めて1日最悪の連続だったけど、飯が美味いと全部許せる気になってくんぜ……」

「そりゃ良かったわ、まあ遠慮しねえでどんどん食えよ。もしお前にも聞きてえこともあつしなー」

「もしやもしやと口の中いっぱい料理を頬張りながら中村が風告げる。」

「聞きてえこと?」

「ほら、お前と俺捕まえたゴリラが無理矢理人に変態したみてえなゴツイ広域指導員がお前になんか態度が変だったじゃねえかよ。あの暴虐教師のあんな様子見たこと無えから気になってよお」

中村の言葉に思い返すのは、プロレスラーか何かの様に筋骨隆々な体軀をした巖の如く厳しい顔をした教師の言動である。

短い沈黙を挟んだ後に、風は呟いた。

「……………魔力とか何とか言ってたな、あのゴツツイ教師」

「……………あ〜ん?んじゃ何か?お前の力はM P 消費したバ○キルトか何かか、若しくはリリ・狩る、本気・狩るな魔法少女の血統だつてか風つち」

「んな訳無えだろ、つうか馴れ馴れしいな呼び方が!?!……………冗談か何かじゃねえのか、何でもねえって言ってたしよ」

「あのゴリポン冗談言うようなキャラしてねんだよなー……………ま、いや、明日にでも問い質しやあ」

新たに炒飯を取り分けつつ中村がそう独りごちる。

「スツキリしねえ口ぶりだなオイ……………まあ俺にはどうでもいい話だわ、これおかわり頼むぞ」

「本気に食うなお前……………いいけどよ」

「すんませーん、と中村が店員を呼び、出てきた細身の姿に相好を崩す。」

「おっ!喜べ風つち、超包子チャオパオズ二人目の看板娘だ茶々丸ちゃんだぜい!!」

その言葉に風が振り返れば、チャイナ服を着た緑髪の少女が此方に向かつてゆつくりと歩んで来るのが目に入る。

凧はその見事に体軸のブレていない静かな歩法をする少女をしばし眺めてから、首を正面に戻す。

「……ロボットなんじゃねえのあの娘？」

そのチャイナ服の少女——絡繰 茶々丸は剥き出しになっている肩や肘、横のスリットから見えている膝等の関節が人形の様な球状関節になっており、耳のあるべき場所にはアンテナの様な角の様なものが一体化している。どう考えても中華屋台に相応しいコスプレでは無い以上、人間がフリをしている訳ではない筈である。

「そーよ、噂じゃ麻帆良工学部の最新科学技術の集大成により生まれただとき。まあそんな起源は如何でもいいとしてロボ娘っていいよなロボ娘って！」

「呑気でいいなお前は……頭痛くなつて来たぞ俺は、どんな所だよ麻帆良って……？」

「難しく考えてつと此処じゃ長生き出来ねえぜイケメン野郎」

凧が中村のお追従を無視して頭を抱えていると、件の茶々丸が注文を取りにテーブルの前まで来た。

「……注文を伺います……っ!？」

無表情のまま完璧な一礼を果たした茶々丸が定型通りの文言を唱えた後、何故か凧の顔を一瞥して僅かに目を見開いた。

………ん?………

この日何度か目撃したその表情、則ち驚愕を意味するその顔に、凧はロボットなのに表情変えられるんだな、等の感嘆が浮かぶよりも早く走った嫌な予感に身を固くする。

最も茶々丸の表情変化には凧以上に驚いたらしく、中村が口を○の字に開いて茶々丸へ問い掛ける。

「ち、茶々丸ちゃん!? 凧っちの顔をそんなに見つめてどうしちゃった訳え、やっぱり男は顔、顔なの!？」

「……?、質問の意図が不明です、お客様」

既に元の無表情に戻っていた茶々丸が首を軽く傾げて中村に返



答し、その後風の方に顔を差し向けて淡々と言葉を紡ぐ。

「失礼致します、お客様の名前がナギツチ様でよろしいでしょうか？」

「いやよろしく無えよ」

ある意味頓珍漢な質問に風は肩をガクリと傾げながら答える。

「それはそのオレンジ髪が勝手に呼んでる渾名？だ。俺の名前は風だよ。……それがどうかしたか店員さん？」

「……いえ、特に意図有つての質問ではありません。無粋な問い掛けをお許し下さい」

僅かな沈黙の後にそう答えた茶々丸は、その後何事も無かった様に二人の注文を取ると一礼して去っていった。

「……なんだありや？」

「て、テメエまさか茶々丸ちゃんに一目惚れされたんじやねえだろうな………!?!」

「いやあの娘ロボなんだろう？ロボ娘って一目惚れすんのか？大体そんな感じの反応じゃ無えだろアレは」

何なんだおい、と内心で呟き、風はぐでりと椅子にもたれ掛かりながら脱力する。中村が何か喚いているが努めて無視した。

「………あー、疲れたなオイ………」

美味しい飯のお陰で多少はマシな気分になったし、食い終えたら寮に帰って今日はもう寝よう、と風がぼんやり考えながら料理を待っていると、何やら後方から話し声が聞こえる。

「マスター、彼方の方です。以前に拝見した写真との骨格一致率は91%を超えている為、同一人物の可能性は極めて高いかと」

「……あれ、これさっきのロボ娘の声じゃね？………」

料理が来たのか？と風が振り返ろうとした瞬間、風は突然何者かに襟首の辺りを横合いから掴まれた。

「あ？」

すわ何事かと首を向ければ、其処には小学校高学年程度の腰まで届く綺麗な金系の髪を戴く、まるで最高級の人形が如き完成された美貌を持つ少女が立っていた。

少女は折角の整った面立ちの眦を吊り上げ、やけに尖った犬歯を剥き出しにして口元を歪めている。

「……………お嬢ちゃん、なんか俺に用かい?」

一種人間離れた美しさと鬼気迫る表情に気圧されていた凧が漸く我に返り、そう問い掛ける。

すると少女は吊り上げた眦を一層見開き、僅かに驚いた様子になり。

その直後に顔が歪み、怒りや悲しみが混ぜこぜになった形容し難い表情を形作る。

「つゝゝゝ!!?、ナギイイイイイイツ!!?!!?」

「っおおあああっ!」

次の瞬間、凧の身体から重みが消え去り、綺麗な放物線を描いて地面へと叩き付けられた。

### 3話 その青年の想いは

人を待つのは耐え難い行為だ。ましてやそれが来るかどうかも解らない者を待つならば尚更に。

15年という歳月は、余りに長い化生の生の中では一瞬の微睡みの様な時間でしか無いというのに。

それなのに私には、少しばかりそれが永過ぎた。

漸く、逢えたじゃないか、ナギ。私に、逢いに来てくれたのだろう？

いや、最早そうで無くとも構わない。お前が再び、私の前に現れてくれたのならば、もう、理由など如何でもいい。

……なのに、何故だナギ。

……………如何して、私を他人の様に扱うんだよ……………

「……………何が、どうなってんだこりゃ？」

麻帆良に在籍する学生にして武道家、中村 達也は目の前の光景に思わずそう、言葉を洩らした。

「もう一度、言ってみろナギ!!? 貴様先程なんとその口から吐いた! ああ!?!」

「ガッ……!!? ……お、い待て……うづんっ!、嬢ちゃん!!? なんだよいきなり!?! ……」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

麻帆良女子中等部3-Aの一員にして一部の<sup>ロリペド野郎共</sup>幼児性愛者に熱い人氣を誇る絶世の美(幼)女にして何故か同じクラスメートである口ボ少女、絡繰 茶々丸を従者として街外れのログハウスに暮らす謎多き金髪幼女。基本的に無愛想を通り越して排他的にして閉鎖的な性格をしており、他者と殆ど関わりを持つこと無くひっそりとした日々を送っている。

それがエヴァンジェリンに対して中村が認識している情報であり、一言で表すならば取っ付きにくい口リっ娘というのが相應しい。

しかしそんな認識を根底から覆すかの様に、現在のエヴァンジェリンは猛り狂い、激昂していた。鬼女の如く眦を吊り上げ、大地に叩き付けた凧の上に馬乗りになって首を絞めに掛かっていた。

「なん、とか、ほざいたらどうだナギイツ!」

「……………あーそうかよそういう事かよ!!? 糞が事情が大体解っちゃったよオイ! また、またあのガキの親父か畜生っ!」

文字通り噛み付かんばかりなエヴァンジェリンだが、勢いとは裏腹に凧がその細い両手を掴んで引けば、簡単に首を絞めていた手は引き剥がされた。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは真祖の吸血鬼である。本来ならば鍛えているとはいえ未だ一般人の枠を越え切らぬ凧の力で太刀打ち出来るものではない。

しかし、エヴァンジェリンは学園都市の結界、及びナギ・スプリングフィールドの掛けた呪いによってその力の殆どを封印されている。今や満月の夜だろうと並みの魔法使いを下回りかねない力しか発揮することの出来ない彼女の腕力かいなちからでは、凧を拘束することは叶わない。

凧は掴まれた両手を振り解こうと暴れるエヴァンジェリンをゲンナリした表情で見上げながら上体を起こし、馬乗りになっていたエヴァンジェリンを抱え込む様に起き上がる。

「っ!!? ナギ、貴様……………!!?」

「お嬢ちゃん、よく聞いてくれ。大事なことだ」

熾火の宿る瞳にしかと視線を合わせ、凧は可能な限りの真摯な姿勢でエヴァンジェリンに語り掛けた。

「何を言ってる、ってな感じで受け入れ難いとか信じられんかもしれないが俺はナギ・スプリングフィールドじゃあ無い、顔が瓜二つなだけの別人だ。学園長先生辺りに確認を取って貰えば証拠になる。一旦落ち着いて、よく俺を見てくれ。俺は本当にあんたの知っている男か?」

「……………っ!!?……………」

至近距離で眼と眼の合ったエヴァンジェリンの顔が憤怒に赤く染まり、風がうわやべえキレたと首を竦めた次の瞬間。

エヴァンジェリンはくしゃりと顔を泣きそうに歪ませて、掴まれた両手のみならず全身から力を抜く。

「……………え……………」

「……………う、いい……………」

その心底傷付いた様子表情に、風は胸の奥に痛みを覚えて、掴んでいた手から同じく力が抜ける。エヴァンジェリンは蚊の泣く様な声で呟いて。

「もう、いいっ!!? 貴様など、知らん!!? 知らん男だっ!!? この馬鹿があつ!!?!!?」

泣き叫ぶ様にその言葉を叩きつけると、風の手を振り解いてエヴァンジェリンは走り去っていった。

「……………」

海よりも深く、重い沈黙が超包子チャオパオズを包む。

風は奇妙に引き攣った表情で、小さくなっていく金色の姿を座り込んだまま眼で追っていたが、其処にそっと席を立った中村が屈み込むと、静かに優しい口調でそう尋ねる。

「風つちよ……………さっきの今だ、俺もいきなり喧嘩腰で問い詰める気は無えさ。話してみればそんなことする奴じゃ無いって俺わかるつもりだからさ……………でもよ」

中村は真顔になって風へ言葉を叩きつけた。

「お前エヴァにやんに一体何した訳?」

「なんもして無えよ俺はああああああああああつ!!?!?」

四方八方から寄せられる非、友好的な、有り体に言えば害虫を見る様な冷たい視線を全身に、風はあらん限りの声で絶叫した。

「……………マスター!!?」

「チクシヨオオオオオオツ!!?!!?」  
再起動を果<sup>我</sup>たした茶々丸と跳ね起きた凧は同時に行動を始め、茶々丸は腰のエプロンを取り払うと、五月に一礼してから両脚のバーニアを蒸かし、チャイナドレスの裾を翻しながら高速での飛翔を開始して、凧は五月の元へ転がる様に駆け付けると懐の財布からあるだけの現金を抜き出してテーブルの上に投げ出し、腰を90度に折り曲げた謝罪の姿勢を取る。

「注意されたつてのに騒がして本当に申し訳ない!!?重ねて失礼だがあのお嬢さんを追いたいんだ、これにて失礼する!!?」

せめてもの迷惑料だ、受け取ってくれ!!?と一層深く頭を下げる凧の姿に、五月は僅かな沈黙を置いてから凧の肩に手を置き、優しく頭を上げる様に促す。

顔を上げた凧の眼に映るのは、これ以上無い真剣な表情で凧の顔を見据える五月の姿だった。

「ひとつだけ、お伺いします。エヴァンジェリンさんのあんな様子は、初めて見ました。……貴方は本当に彼女があんなになつてしまう理由に、心当たりは無いんですか?」

「……理由は解らねえが原因は思い当たるモンがある。……でも俺はそれに関係無えんだ。……関係してんならどうとでもしてやれる、でも俺は!!?……関係無えんだよ、クソツタレた事に……!!?」

凧は歯噛みしながら軋る様にそう答える。

凧だって、あんな顔で女の子を泣かせたい訳が無かった。

五月はそうですか、と一言呟いて、僅かに表情を和らげると、テーブルの現金を手際良く纏めて再度凧の手に押し付ける。

「……ん?」

「……それでしたらお金は受け取れません、貴方に責任は無いのでしようから。……それでもお気に病まれるのでしたら、店主としては無く、彼女のクラスメートとしての私のお願いを聞いて下さい」  
五月は姿の見えなくなつてしまったエヴァンジェリンの方角を見て、その言葉を告げる。

「……彼女を、助けてくれますか?子供先生似の、お兄さん」

「……………ははっ……………!!?」

成る程、金で済ませるよりよっぽど大変だわな。と凧は笑って、「了解した、仲直りした暁には今度こそ有り金全部落としにまた来るぜ!!?」

凧は言葉の終わりと同時に全身へ光を疾走<sup>はし</sup>らせ、そう叫んだ。

「どおおおおおこ行ったあのお嬢ちゃんんっ!」

凧は全力で全身を強化しての全力疾走でエヴァンジェリンを捜索していた。最早車道を走る自動車を遙かに上回る速度であり、時折身体の周囲で響き渡る乾いた竹が弾ける様な音からして、下手をすれば瞬間的に音速を超えている様だ。

………なんで俺が追っかけなきやいけねえんだ、とは思っけどなあ!!  
?……………?

凧の脳裏に浮かぶのは、悲痛に歪んだエヴァンジェリンの去り際の顔である。あんなにはつきりと嘆き悲しんだ女性<sup>おんな</sup>の表情<sup>かお</sup>を、凧は産まれて初めて見たのだ。

「…俺は知らねえ、でばっくれるには寝覚めが悪過ぎんだろっうがあああっ!!? 傍迷惑にも同じ顔と名前した腐れ野郎が!!? 一体全体何やらかしやがったんだ畜生があっ!!?」

まだ見ぬナギ・スプリングフィールドに対する怒りを力に変えて凧が縦横無尽に走り回っていると、甲高い風切り音の様なもの耳に飛び込んで来る。凧が音のする方向へ全力で跳躍、踏み台にしたガードレールを捻じ曲げ木々の枝葉をへし折りながら数十mの距離を跳び、木々の合間にひっそりと存在する細道を縫う様にして飛翔していた茶々丸の傍らへ降り立った。

茶々丸は派手な破壊音を撒き散らしながら接近して来た謎の目標に水平飛行体勢のまま身構えていたが、正体が凧と知れると構えていた腕を下ろし、小さく一礼してから前方に向き直る。

「お客様、いえナギ様。不躰ながらお聞きしたい事がございます」

「皆まで言わんでいい大体解るから!!? 俺がナギ・スプリングフィールドとかいうタコ野郎本人じゃ無えのかとそう聞きてえんだろっうが

!?生憎だが完つ全に別人だ!!?何故か顔と名前が似通つちやいるが俺は華の17歳!産まれてこの方故郷の田舎を出た事も碌に無えのにあんなお人形さんみたいなの外人少女とお近づきになる機会なんざあるかあつ!?!」

血を吐く様な風の断言に暫し茶々丸は沈黙し、聽て無表情のまま言葉を投げ掛けた。

「……ナギ様、申し訳ありません。先程の発言に確たる根拠や証拠をご提示頂けない以上、私としましてはナギ様の言を肯定する訳にはまいません」

「ああ別に即座に切つて捨てねえならそれでいい!!?どうせアンタが納得したところで今追っかけてるお嬢ちゃんに理解してもらわねえことには意味の無えこつたからなあ!!?」

叫ぶ様に返した風は急激にカーブしている道の先に踊る金糸の先を視認した。

「つ!!?…つシャアアアアアアアツ!!?」

風は更なる加速を己の身体に命じ、並走していた茶々丸を置き去りに土煙を跳ね上げながらカーブをドリフト地味た勢いで曲がり、

「……………つ!!?」

曲がった先の光景が視界に映し出されるよりも一瞬前、猛烈な悪寒に襲われた風は、頭が何か判断を下すよりも早く本能に従つて両の脚で大地を蹴った。

直後、不安定な体勢から跳躍した為に回転しながら宙を舞う風の、反転した視界の端を複数の試験管が通り過ぎ。

バギイイイイン!!?という硝子の塊が地面に思い切り叩き付けられた様な、甲高い炸裂音と共に風の眼下の地面や樹々が凍り付き、粉々に碎け散った。

「……………はあああああつ!?!」

風は無意識に体勢を安定させ様と両脚でトンボを切りながら、今し方起こつた超常的現象に絶叫する。

……何だ!?液体窒素かなんかが……いや試験管が割れただけであんな風に広がりはしねえし、何よりあれっぽっちのガラス管に入つて



る量でこんな範囲の凍結は有り得ねえ!?……………つ!?……………

有り得ないならばなんなのだ、と。

己の中で何か問いが掛けて来た気がして。凧は一瞬思考が停止した。

凧らずも無心になった事によって、対処する為の高速思考による集中と危害を加えられた動揺、危機的状況による興奮等により極度に狭窄していた視界がフラット本な働きを取り戻す。

それにより凧は、回転しながら飛んで来た試験管がひとりでに爆ぜ割れ、数条の冷たい輝きを宿す氷の矢に変貌かわって己へと突き進むのを正確に知覚することが出来た。

「……つ!?つぎは、んなああ!!?!?!」

着地にそなえて緩やかな回転に移ろうとしていた身体を、反動を付けて振り抜いた手足により再び急速回転。風車の如く回転まわる身の遠心力を乗せて振り抜いた両脚の踵が氷の矢を粉々に打ち砕き、その迎撃を逃れて回転する胴体の中央を狙う残りの2矢を、凧は無理に上体を振り落しながら繰り出した両の手刀で叩き砕いた。

「……つはあつ!!?!?!危ねえな畜生あ!!?!」

ザツシヤア!!?!と、豪快な着地を決めた凧は、身体に付いた勢いを殺す為に前後へ踏ん張りつつ悪態を吐く。

凧が前方を睨めば、遠くに射殺す様な視線を向けつつも足を止めず、試験管を片手に走り去ろうとしているエヴァンジェリンの姿があった。

……何なんだありや、……いや、いい。訳解らん攻撃の正体なんざどうだつていい!!?!?!問題はんな真似をしてまで追つて来て貰いたくねえつてぐらいあの嬢ちゃんがこの面に思う所があるつてこつた!!?!?!……………

知らねえとはいえ俺が誰だお前的な反応して盛大に地雷踏ん付けたつてかあ?と、凧はどことん間と運と巡り合わせが悪いらしい、麻帆良此処に来てからの己がホトホト嫌になってくる凧であったが、そんな思考とは裏腹にその両脚は再び走り出す。

「……おい、待てよ嬢ちゃん!!?!?!止まって話を聞いてく」五月蠅い、五

月蠅い五月蠅い五月蠅い!!? 黙れえええ!!?!!?」……っうおお!!?」  
やはり少女の脚か、見る見る距離の詰まっついていく背中へ懸命に呼び掛けるが、皆まで言い切りもしない内にエヴァンジェリンが痲癩を起こした様に喚いて凧の言葉は遮られ、懐を弄り放り出された無数の試験管に凧の呼び掛けは悲鳴に変わる。

バン!バギヤアアアン!!?と氷の練爆が巻き起こる中、凧は全身に纏う光を強化して強引に突っ切る。

爆煙にも似た靄を切り裂いて、凧は目の前に迫ったエヴァンジェリンのか細い右手を押し折らぬ様に加減して、されど離されぬ様しかと握った。

「……………!!?…:はーな!!?…:せええええええつ!!?!!?」

激昂した様に吼えるエヴァンジェリンが掴まれた腕を振り抜いた瞬間、凧の身体はまるで人形か何かの様に天高く浮き上がり、脳天からまつ逆さまに地面へと振り下ろされる。

「おおおおおおお!!?」

しかし、凧はこの投げを先程超包子チャオパオズにてエヴァンジェリン自身から喰らっていた。

仕組みを頭で知らずとも凧の身体は、一度味わされた苦痛いたみを拒絶する。

エヴァンジェリンの織手により弧を宙に描いた凧の身体は、軌道が頂点に達する直前に両脚を振り下ろして自ら加速。エヴァンジェリンに加えられた半回転の勢いへ己で更に半転を加える事により、海老反りの様な姿勢で両脚の裏を地面に叩き付け凧は転倒を防いだ。

「くっ……………!!?」

「聞けっつーのお!!?!!?」

凧の手を振り解こうと身体を捻るエヴァンジェリンの片脚へ、凧は手を掛けると一気にその全身を引き寄せた。投げられた勢いを殺し切れていなかった凧はそのままエヴァンジェリンを抱え込む様にしたがら二人揃って地面に転倒する。

「っ!離せ、貴様アツ!!?」

「五月蠅え暴れんな!!?頼むから話を……」

「黙れ!!? 愚にもつかん言い訳など聞きたくも無い!!?」

「痛ッッ……!!?」

押さえ付けられ暴れるエヴァンジェリンを凧は抱きすくめる様にして落ち着かせようとするが、エヴァンジェリンの振り回した片手の鋭い爪に頬の辺りを抉られ、血が飛沫く。

「……、テメエガキい加減に………!!?」

流石に頭へ血が昇りかけた凧は、エヴァンジェリンの顔を睨み付けて。

その眼に浮かぶ大粒の滴に、思わず息を呑んだ。

「私が……っ! 私がどれだけ!!? どれほどお前を待ち焦がれたのか、理解わかっているのかお前は!?! お前は、約束の時間を過ぎてても、現れ無くてえっ!!? ……この15年間、私が……どんなに………!!?」

ボロボロと。真珠の様に透明な涙を零しながら、クシヤクシヤに顔を歪めて凧の胸倉を掴み上げ、エヴァンジェリンは慟哭する。

「死んで、しまったと聞いて!!? 何も、かもが!!? 私っ……私には、お前が……お前だけ、があ………ツグ、ウウウウウウウウ……!!?」

胸倉を掴み上げる手は何時しか弱々しく。小さな頭を凭せ掛けて、顔を己の胸へ埋めて泣くエヴァンジェリンに、凧は何も言葉を掛けられなかった。

色々と、言いたいことは有った。15年つてなんだどう見ても10歳そこそこ位じゃ無いのかアンタ、とか、死んだっていうんなら何で俺にちよっかい出したんだ、とか。

しかし、そんなつまらない言葉を、懐の弱々しく震える少女に、凧は投げ掛ける気にはなれなかった。

そして思う。自分は、此の期に及んでも尚、目の前の少女に真実を告げるべきだろうか、と。

……事情を知らない俺でも、何となく解る………

……この娘は、あのガキの親父が好きなんだ……だからこんなに憤って……こんなに悲しんでいる………

怒りも憎しみも混ぜ合わされつつ、エヴァンジェリンは再開を、喜んでいる心が確かにある。此れ程までに忘れられていたと嘆き怒

りながらも、その忘れた男の胸で哭くのだ。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは、此の期に及んでまだナギ・スプリングフィールドを愛していた。

だからこそ凧は、エヴァンジェリンに対して、既に傷付き震える少女に対して。この上自分が単なる顔が似ているだけの別人だ、などと絶望の上塗りをして良いのかと、凧は苦悩した。

だが、しかし、それでも。

……この娘の、この嘆きを怒りを……………

……この言葉を掛けられていいのは、俺じゃねえんだ……………!!?!!?」

安易な同情や罪悪感程度のことと譲ってはいけないものを、春園 凧は履き違えたりはしなかった。

「……………その言葉を、吐いていいのは、俺じゃねえよ、お嬢ちゃん……………」

力無く、されど軋る様な震える響きの混ざった凧の小さな声に、エヴァンジェリンが一度小さく震えて反応する。

「……………ナギ……………まだお前は……………「俺はナギじゃねえんだよ!!?」……………っ!」

虚ろな瞳で力無く呟いたエヴァンジェリンの呼び声は、血を吐く様な凧の叫びに掻き消されて。エヴァンジェリンは僅かに目を見開く。

「……………なにを……………」

「違うんだよ!!?あんたが縋り付いていいのも!恨み言を述べていいのも!!?俺<sup>凧</sup>じゃあねえんだ、ナギなんだよ!!?!!?」

凧は叫ぶ。叫びながら潰れそうな胸の痛みに耐えていた。

……………なんで、こんなになつてまで一人の男待ってる様な娘の所に、俺みてえな紛らわしいのが現れちゃうんだよ!……………

それが運命か、神様の悪戯か?巫山戯んな!?!と、凧は声にならない叫びを上げる。

「今すぐ出て来やがれ、ナギ・スプリングフィールド!!?ドタマ擦り付けてこの娘に詫びやがれ、なんで、なんでこんなことになってんだよ、畜生!!?巫山戯んな、ふざっけんなあああああつ!!?!!?」

何時しか滲む涙を堪えつつ、凧はエヴァンジェリンの身体を抱き締めていた。

「…俺は、お前の待つてた、男じゃねえんだよ……!!?紛らわしくて、本当に悪い……!!?……でも、お前も見紛うなよ、ちゃんと俺の顔見ろよ……っ！お前の好きな男の顔、ちゃんと思い浮かべて俺を見ろよ!!?……そんなになるまで、想つてる男の顔……見間違えんじゃ、ねえよお……!!?」

凧は折れんばかりの力を込めて、エヴァンジェリンを抱き締める。エヴァンジェリンは呆然と目を見開きながら、凧の身体に手を回す。

「なん、だ……?何を、言つてる、お前、は……?」

なあ、と、抱き付いて来る力を強めるエヴァンジェリンの顔を一層強く胸に埋めて。

凧は堪え切れずに一筋、二筋と涙を零れさせながら、ただエヴァンジェリンを強く抱き締めていた。

「……………マスター……………」

二人の嘆きを前に、茶々丸は離れた場所から声を掛けられずにいた。未だ心を正確に知り得ぬ幼い機械仕掛けの少女には、まだこの押し潰される様な感情の波を前に、浮かぶ想いをまだ形に出来はしない。

無表情のまま立ち竦んでいた茶々丸は、背後から微かに響く足音を音感センサーに捉え、即座に身体を翻した。

「……………高畑先生……………」

「……………やあ、茶々丸君……………」

其処に立っていたのは、沈痛な表情を浮かべた高畑であった。

「……………済まない、大体の事情は理解している。これは僕達魔法関係者の怠慢が起こした事態だ……………」

「……………では、彼方の方はやはり……………?」

頭を下げる高畑の言葉に、茶々丸は静かに事実を問い合わせる。

「……ああ、そうだ。僕にしても未だに信じられないが、彼は全く無関係な一般人なんだ……エヴァには慎重に事実を伝えるつもりだったけれど、裏目に出てしまった……!」

「……………マスター……………」

唇を噛み締めて事態の悪化を悔いる高畑を傍らに、茶々丸は言葉も無く己が主人の身を案じていた。

「……………はは、なら、なんだタカミチ。こいつはナギでは無くて、ただ単に顔が似ているだけの、別人だと。……そう言っている訳か? ええ?」

「……………ああ、その通りだエヴァ。彼の身元は不完全ながらも確認が済んでいる。魔法で変装したり、妙な術式が掛けられてナギが混乱している訳でも無い。……正真正銘、凧君はナギとは別人なんだ……………」

奇妙に歪んだ笑みを浮かべながら問い掛けたエヴァンジェリンに、高畑は苦渋に顔を顰めながらもはつきりと肯定した。

あれから暫く。タイミングを見計らって現れた高畑の手によって説明の場が用意され、高畑の今朝を始まりとした事情の説明が済んでいた。

エヴァンジェリンは黙ってその話を聞いていたが、事実が直ぐには受け入れられない様子である。

……当たり前、だわな……………

涙の痕を擦りながら、凧は歯を噛み締めてしみじみと思う。

何せそんな瓜二つの他人が居ることを凧自身が未だに信じ切れていないのだ。到底信じ難い荒唐無稽な話だということは凧もよく理解<sup>わか</sup>っている。

それでもそれは真実であり、真実とは時として残酷な代物だっ

た。

「は、はは……そんな、巫山戯た話が有っていいのか、オイ？お前が、ナギでは無い？……ならば貴様はなんだ、一体何だというんだよ、オイ」  
抑揚の無い調子で途切れがちに笑っていたエヴァンジェリンは、臆て首を捻じ曲げて足を進め、風の襟首を掴み上げる。

「……エヴァ!!?……!!?」

「黙ってる、おっさん」

明らかに平常心で無いエヴァンジェリンの状態を危険と見て止めに入ろうとする高畑を制止したのは、他でもない風だった。

……そりゃこれはアレだ。明らかに八つ当たりだ。冗談じゃねえよ、俺だって……

風とて聖人君子では無い。エヴァンジェリンを心より可哀想に思うし、心底救われて欲しいとも考えているが、こと現在に於いても自身に非は無いと風は思っている。謂れの無い暴力など振るわれるのは真つ平御免だ。

……でも、なら他に誰が受け止めりやあいんだよ。この娘のやり場の無い怒りと絶望を……

己は悪くない、悪くはないが。

己が原因ならば避けてはならぬと、風は己に課していた。

風は半ば縋り付かれる様にエヴァンジェリンに襟首を握り上げられ、至近距離でその燃える瞳を見据える。

「一体何の悪趣味だ？何処まで私が嫌いだよ世界は？……なんとか言ってみろ!!?その巫山戯た面で！何か言ってみろよ貴様あああああつ!!?」

「……あなたにとつちや存在ごと否定したくなるんだらうよ、俺はさ……」

ギリギリと首を絞め上げられながらも眉一つ動かさずに、静かに風は言葉を返す。

「悪いが俺も愛されて育った、存在を否定される謂れはねえ。……今回の一件、アンタには気の毒に思うし、俺の対応も上手くは無かった、其処は謝る」

……けどそれ以外には、俺はアンタにどうともされてやれねえし、それ以上言える事もねえ、と凧は言い切った。

「……………そう、か……………」

至近にあるエヴァンジェリンの瞳が僅かに揺れて。

唐突に突き離される様にして、凧はエヴァンジェリンから距離を置かれる。そのままエヴァンジェリンは傍らに黙って控えていた茶々丸を促すと、無言のまま踵を返した。

「……………エヴァ」

「五月蠅い」

高畑が声を掛けるが素気無く切って捨てられる。思わず立ち上がった凧は、悄然とした背中に声を掛けようと足を延ばすが……

「黙れ」

「っ……………」

斬り付ける様な冷たい断絶の言葉に、足を止めて立ち竦む。

「……………済まん、八つ当たりだと、理解はしている……………しかし、今はお前の面をこれ以上、見ていたくないんだ……………」

「……………」

力無く振り返つてのエヴァンジェリンの言葉に、凧は返す言葉をもち得なかった。

「……………何れ改めて詫びに行く……………済まなかったな……………」

力無い声のまま再度謝罪をすると、エヴァンジェリンは此方に向けて一礼した茶々丸と共に夜の森へと消えていった。

「……………糞が……………」

小さく吐き捨てると、凧はエヴァンジェリンが視界から消えるよりも早く、己も踵を返す。

「……………凧君、今日の一件は……………」

「誰にもいいません、治療も要りません。……………説明も今は、いいです」  
高畑の言いたい事を大体において察していた凧は素早く言葉を紡ぎ、高畑を遮る。

「……………俺も今は、1人になりたいんすよ……………放つといて下さい……………！」  
「……………済まなかった、失礼するよ」





## 閑話 母と子の想いは

『凧…… 声を聞くのは随分と久しく感じますね……』  
「ごつちもだよ、ミテラ。正直俺は早くもホームシックになつちまい  
そうだ」

夜も更けた、薄闇に包まれる男子寮の一室。雑然と物が未整理のま  
ま置かれている、如何にも引越し初日といった感のある部屋の中央  
にて、凧は携帯電話を耳に会話していた。

『それはそれは…… 何か災難にでも？ 凧は見目麗しいからやつかみで  
も受けてしまいましたか？』

「……なあ、ミテラ。解つてて言っているんだらう？」

電話の向こうで何時もと変わらず、凧いだ水面の如く静謐な微笑み  
を浮かべているのであろう己の唯一の家族へ、凧はともすれば高ぶる  
動悸を抑えながら尋ね返した。

『…… 何の話ですか、凧？』

「こんな真夜中に普通に電話に出てくれたんだ、掛けてくると思つて  
たんじやないのかよ…… 俺に此処麻帆良への入学を薦めてくれたのはミテ  
ラじゃねえか！ 惚けんのは止めろよ!!…… 今日一日だけで何回訳の  
解らねえ人違いに巻き込まれたと思つてんだ、知つてて俺を此処へ寄  
越したんだろミテラ!？」

凧は抑えるつもりだった声を我慢出来ずに途中から荒げ、語気も荒  
く問い詰める。

「ナギ・スプリングフィールドとかいう巫山戯た名前の野郎だよ!! 多  
かれ少なかれ全部そいつが原因で俺は散々な目に遭つてる！ なあ、誰  
なんだよそいつは!? 姿形からそっくりだってんだ、俺とも無関係じゃ  
無えんだろ!? 俺は、唯学ぶもん学んで適当にはっちゃけて、普通に学  
生つてのをやりたいだけなのに…… 何が起こつてんだよ、俺の周  
りに!？」

一息に込み上げた想いを言葉にして迸らせてから、凧は僅かに乱れ  
た息を吐きつつ返事を待つ。

暫くの間、耳に当てた携帯電話は沈黙していたが、聴て抑えた静か

な声が響き出した。

『… 凧、貴方の憤りは最もです。貴方の言う通り、私は凧が麻帆良という土地へ顔を出せばある程度騒動が起こり得るであろうと、予想はしていました』

『… だったら!!』

『しかし』

肯定の言葉に、激しく何事かを言い募ろうとする凧は続く言葉に機先を制される。

『私は貴方が世に出る上で、どうしてもそれが避けては通れない道だと考えています。凧、貴方があの牧歌的な片田舎で骨を埋めるというのならば、私はこんな真似は断じてしませんでした』

『… 俺は…』

『ええ、解っています。だから貴方の所為だ、等と私は言いません。全ての責任の所在は私にあるのです、凧。… 貴方は無論のこと、私も貴方が世に出る事を望んであの村から貴方を外へ出しました。誤解無き様あの時の台詞をもう一度言いますが、私は凧に自由に生きてもらいたいのです』

『… だったら。だったら何なんだよ此の場所は。訳の解らねえ蒸発親父の尻拭いをするのが俺の自由だとてもミテラは言いたいのか?』

幾度となく先を制されて淡々と論す様に言葉を受け、ボルテージの下がった凧だったが、どうしても聞き逃せない質問を止めることはしなかった。

『断じて。私は他人を思いやれる貴方の心優しい気質をととても好ましく思っています。しかし、私はむしろ凧にもっと自分勝手に生きてもらいたいのです』

『… どういうことだよ』

『無視なさい、放っておきなさい、関わることを止めなさい。姿形の似ている父無き子の少年が嘆いているからといって貴方に関係はありません。想いを寄せる男に見捨てられた形になっている 哀れな女に貴方が手を伸ばす義務はありません。文字通り住んでいる世界の違っている、昔の英雄とやらの姿形が似ているだけで貴方を色

眼鏡で見ようとする連中に、貴方が関わりを持つ価値などはありません』

凧の疑問に答えるその声は、何処までも冷たく凍えていた。

『私が凧を関わらせたのは、凧が世に出る以上何らかの形で、必ずそのしがらみは凧に付いて回るだろうと予測したからです。貴方が何処で何をしようと、必ずその呪いのような容姿に関する誤解と災難は貴方を逃がしはしない。ならば知った上で無視なさい。知らない顔をして黙殺なさい、凧。残念ながら貴方に関わりは無いとは言えない、しかし貴方に責任は間違いないから…。貴方は貴方の、望む様に生きなさい』

凧は告げられた言葉に暫し沈黙して、呟く様に言葉を洩らした。

「……俺は、何者なんだ、ミテラ?」

『答えられません』

答えは即座に返って来る、拒絶という意味を持って。

「どうして!!?」

『貴方がそれを知る必要が無い故にです。根源ルーツを知らずとも貴方は立派な青年に育ちました、貴方が人生を全うする上で必要の無い情報であると、私は判断します。……知っても良いことなど、何もありませんよ、凧』

「俺自身の事じゃ無えか!?知る権利があるんじゃないやねえのかよ!!?!!」

淡々と言葉を紡ぐ相手に対して、凧は憤りも露わに問い詰める。自分分は決してネギに、エヴァンジェリンに。無関係では無いと告げられてしまったのだ、事の真相を知りたいと凧が望むのは当然のことだろう。

『……凧、貴方が呼ぶミテラという私の名は本名ではありません。最早元の名を名乗るつもりは無い以上、この名を真名と定めることに最早抵抗は無いとはいえ、です』

しかし電話の相手ーミテラは唐突に、己の話始める。

「……知ってるよ!!?ミテラが言ったんじゃないやねえか、俺が小さい時に!!?事情わけあつて本名は教えられないが、俺を愛しているのに何ら変わり

は無いことをどうか理解<sup>わか</sup>って欲しい、だろ!? そんなことが何だつてんだよ今更!!?」

『……そんなこと、ですか風』

苛立たし気な風の返答に、何故かミテラは微かに笑う様な響きと共に眩きを返した。

『私の本名を教えられないのも、貴方の出自に関する情報だから、なのです。風。仮初とはいえ育ての親である私の秘密主義等、面白い筈は無いでしように。本当に風は気持ちの良い男子に育ってくれました……』

「……仮初なんて言うなよミテラ。俺の親父やお袋が誰だろうが、興味はあっても逢いたいなんざ欠片も思っちゃいねえんだ、俺は」

風はこれまでとは質の違う、深く静かな怒りを静かな声音に乗せて言葉を放った。

「俺にとってはミテラだけが家族だ。育ての親で、俺の母親も同然だ!!? ミテラは俺を、真面に育て様としてくれたじゃねえかよ! 親無き子だか何だか知らねえが、そんな劣等感も欠片も感じない位に俺を、愛してくれたじゃねえか!!? 俺は頭がそんなに良かねえんだよ、照れ隠しに言ってるのか気い使ってるのか遠慮してるのか知らねえが、今更他人行儀な言い方すんな!!?」

面と向かって暮らしていた頃は気恥ずかしくてとても告げられなかった想いを、風は迸る感情に任せて言葉にした。

「俺は……あんたを!!? ……いっつも遠慮してるみたいにして生きてるミテラを、もつと幸せにしてやりたくて田舎出たんだよ!!? ミテラからすりやまだまだヒヨッコの若僧かもしれねえけど、もつと俺を信用してくれよ!!? 今更何聞かされた所で傷付きもビビリもしねえ! 俺が成長したって言うんなら、対等に俺をきちんと見てくれ!!?」

語気は荒いながらも、何処か懇願する様な響きを纏った風の願いに、短くない沈黙をはさんだ後。ミテラは悲し気に、されどはつきりと、その言葉を告げた。

『……ありがとうございます、風。所詮は自己満足に過ぎない、貴方と過ごしたこの十数年が無意味では無かったと、私は今感慨に打ち震

えています。……しかし、矢張り貴方に今、真実を告げる事は出来ません。貴方に降り懸かるであろう柵の大きさは、知らずに生涯を全う出来るものならばそう在ってほしいと、私は願わずにいられはしない代物なのですから』

「……ミテラ!!?」

『……こちらの古き言葉で、ミテラとは母という、意味を持ちます。…貴方にとって私が母の如く在れたのならば、それだけで私は報われました』

風の叫びを黙殺して、ミテラは淡々と言葉を紡ぐ。

『既に私は村を出ました、家の事は鬼ノ宮のお爺様に任せてあります。私はこれより消息を断ちますので探す行為は無意味であると、告げておきましょう。もう一度言います、自由に生きなさい風。貴方は春園風、ナギ・スプリングフィールドでは無いのですから。…誠に手前勝手な想いではありませんが、またいずれ相見えることを願います、風。……私も貴方を、息子の様に、或いは歳の離れた弟の様に。…思っていましたよ』

「…おい待て、ミテ……!?!」

プツリ、という軽い音と共に。

風の必死な呼び掛けにも構わず、ミテラは電話を切った。

「……とはいえ、風。貴方はおそらく進むのでしょね、荊の道を……」

パチリと軽い音を立てて携帯電話を閉じ、ミテラは軽く息を吐いた。

だだっ広い平野に吹く夜風に揺られ、ブルネットの長髪が僅かに靡く。

「……偽りと欺瞞に満ちた、歪んだ義理の家族関係。私の様な人間の元で、貴方は曲がらず情の深い、優しい子に育ってくれた……そんな資格は無いと解っていても、私はそれが誇らしくて堪らない……」

でも、そんな貴方の魅力はきつと貴方自身の首を絞める、と、ミテラは切なそうに呟いた。

『はははははは!!? どうだミテラあ!!? 猿捕まえたぜ猿!!?』

『な、ナギ!!? そんな高い樹の上で……何を捕まえているんですか!!? 今すぐ放しなさい!!?』

『わははははは!!? 風坊は本当に元気じゃなあ! 飛び出してつたドラ息子を思い出すわい!!?』

『いんやあ、ヒロの小坊主なんぞよりもよっぽど活きが良かろうて風ちゃんは。綺麗な面立ちをしとるし、神さんに愛された子じゃあてほんに……』

『み、皆さんナギを、ナギをどうか!』

『ははは大丈夫じゃミテラさん。風坊は山猿なんぞに負けて、ほら関節極めとるわ獣相手に!!?』

『阿呆、カカアからすりや心配なのは当然じゃて呆け爺い。こりや風いーっ!!? ミテラの嬢ちゃんに心労掛けんでないわこの悪童がああああ!!?』

『五月蠅ー糞ババア! 猿の脳味噌が美味いつて繼叢の婆ちゃんが言うから獲ってきたんだよ猿!』

『……お前が原因じゃないか鬼婆あ!!? 餓鬼に妙な話仕込むでないわ!!?』

『五月蠅いわ糞爺い! 獲つて来いなんてアタシや一言も言つて無いさね!!?』

『風ー! 如何でもええから降りてこんかい、お母さんにあんま心配掛けるで無いわー!!?』

『あいよー鬼ノ宮の爺ちゃん、今行くぜミテラあ!!?』

『な、ナギ! 普通に降りて……キヤアアアアア!』

『わはは飛び降りよつたわあー!!?』

「……ふふ……」

心が細った故にか、昔の記憶がふと脳裏に蘇り、ミテラは先程迄の苦悩するが如き表情を、小さいが暖かみのある微笑に変えた。

……或いはそれでも。貴方なら笑って乗り越えるのかもしれない

ませんね、風……………

「あんな英雄風情と貴方は違うのだから、風……………！」

何かを振り切るようにそう一言呟いて、ミテラは止めていた歩を進め、石柱の様なものが建ち並ぶ遺跡群のような場所に向って歩み始めた。



## 4話 父と子?の關係は

「……そか。お前も中々苦勞してんなあ、ネギ…だっけ?」  
「は、はい……」

完全登校時間まで1時間余りを残した朝の賑わいが喧噪という形を取って空気を穏やかにかき混ぜる中。麻帆良女子中学校の校門から暫らく歩いた先にある小さな公園のブランコに腰掛けた凧のしみじみとした眩きに、隣でやや所在無さ気に腰掛けたネギが応えた。

『お前の親父さんについて知ってることを教えてくれ』

校門前にてそう切り出した凧に対して、ネギはしどろもどろになりながらも難色を示した。ネギがナギ・スプリングフィールドについて他人へ説明しようとすれば、否が応にも魔法関連の話が挟まってくる。

凧についてネギは父親にそっくりだ、という点でどうにも気になる存在ではあるが、エヴァンジェリンとのいざこざを知らないネギにとって、凧の認識はあくまで騒ぎに巻き込んでしまった一般人に過ぎない。幼い頃から魔法の秘匿を肝に命ぜられて来たネギからすれば当然の反応だった。

しかし、実のところ凧はネギへとこうして会いに来る前に昨日悪縁の結ばれた学園都市の広域指導員、高畑・T・タカミチの元を早朝訪れていた。

『あんた方は何者で、そしてあの娘は俺に面がそっくりだって糞野郎と何があつたんすか?』  
ミテラ<sup>家</sup>に教え込まされた上辺の礼儀正しさを捨てて尋ねる凧に、高畑は大分長い沈黙の後全てを語った。

曰く、この世界には魔法と呼ばれる力とそれを扱う魔法使いという存在があり、高度な科学技術を元に発達した現代社会とは全く異なる文化を世界の裏側で形成している。

曰く、魔法の存在は魔法を知らない一般人には秘匿されており、魔法使い達は公の為にその力を役立てる為に力を磨き、陰ながら社会に貢献している。

曰く、春園 風に顔立ちの酷似しているナギ・スプリングフィールドとは魔法使いの間では英雄と称されるかつて世界を救った文字通りの救世主であり、ネギ・スプリングフィールドの父親である。曰く、ネギ・スプリングフィールドは立派な魔法使いを目指して日本の魔法組織大多数を傘下に構える一大組織、関東魔法協会の管理する麻帆良学園都市へ修行の為、教師の見習いとして赴任して来た少年であり、現在行方不明の父親を探している。

そして。

曰く、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは齡六百歳を越える真祖の吸血鬼であり、かつて600万\$の賞金が生死を問わずで賭けられていたS級の犯罪者である。約15年前にナギ・スプリングフィールドによって捕らえられ、その力の大半を封印された上で麻帆良の地にて魔法使い達と共に防衛者として暮らしている。

……まああれだ、正直とっても理解は追いつかねえが人間ってのは存外ひ弱な生きモンだと本にはあったしなあ。俺ん所の爺婆やミテラがおかしかっただけつーオチならまあ、納得はいく話だぜ……話を聞いてコメントを求められたならば荒唐無稽、の一言で片付けたくなる一連の情報を思い返して、風は 一つ息を吐く。

ネギは事情を知っている風を高畑から話を伺った、と聞いた時点で魔法関係者の一員の様なものと風を認識したらしく、ポツリポツリとではあるが父親であるナギ・スプリングフィールドの情報、ひいては己の出自と事情迄をざつくばらんにはあるが語った。

……正直詳しく話を聞かねえでもこの坊ちゃんやんが中々に悲惨な半生送ってんのと、随分親父を気に掛けてんのは解る。…当たり前、か。唯一の肉親、ってんならな……

俺はその当たり前じゃあ無えんだろうけどよ、と風は小さく呟いてからネギへと改めて向き直り、言葉を投げ掛ける。

「ネギ、お前親父さんに逢いたいだろ？」

「……はい」

ネギは風の顔を一瞬驚いた様に見上げたが、ややあつてこつくりと

頷いた。

「…だわな。だったら見付けた暁にやあ8割殺しから半殺し位には抑えてやるか、健気な息子に免じてよ」

「え、え？……」

ポツリと呟かれた物騒な台詞にネギが戸惑った様に疑問符を洩らしているが、そんな様子には構わずに凧はネギへと告げる。

「ネギ、俺はお前も知つての通りお前の親父さんにクローンか、つてレベルで顔が似てる。お前や高畑…先生とのいざごはその所為で起こつたんだよなあ。……実の所お前さんと別れた後にもこの面の所為で面倒臭い事態に巻き込まれてる。お前の親父さんはどうにも、此処麻帆良じゃあ色々やらかしてくれた奴みたいだぜ……」

悪い事ばかりやらかしたつて訳じや勿論無えんだろうけどな、と、凧は僅かに言葉の途中で苛立ちの乗った己の空気に萎縮した様子のネギへとフオローの言葉を続けた。

「そんな訳だから俺も、お前と動機は違えどお前の親父さんに会つてみたいんだ。会つてその紛らわしい面ボコボコに……ん、ンツ！一言文句を言つてやりてえからよ。だからネギ、お前さんは修行の為か何か知らんが、親父探しそれの他にもやる事があるだろ？だったら俺にも手伝わせてくれよ、探すのを。人手つてのは多い方がいいし、情報共有すりやあ何か解るかもしれねえからよ」

俺はお前に協力する、だからお前も俺に協力してくれ、と、凧はブランコから立ち上がつてネギに頭を下げた。

「な、凧さん!? 僕は、そんな……!」

「はじめだよネギ、筋はしつかり通さねえといけねえ。俺とお前は御面相の所為で気になる間柄、つてか親近感みたいなモンがあつて、何となく他人とは思えねえ感じになつちまつてるけどよ。今の所俺とお前は何でも無え、ただの他人だ」

「……!……!……!はい……!」

頭を上げた後、やや唐突に突き放すような物言いをする凧にネギは驚いて息を呑むが、言葉の内容自体に誤りは無い為、暫しの間は空いたものの何とか首を縦に振る。表情がやや硬くなったネギを見て凧

は苦笑を浮かべると、ネギの頭をわしやりと掻き撫でる。

「んな怖え顔すんな、別に俺はお前が嫌いな訳じゃ無えよ。…ただ何処まで言っても俺はお前の親父じゃねえし、俺にとつてもお前は俺がムカついている奴<sup>ナギ</sup>じゃ無え。含む所のある微妙な間柄だけど、お互いそこから辺は勘違いせず、割り切った上で仲良くやってこうぜ、って話だよ」

だから改めて、宜しく頼む、と、凧はネギへ開いた掌を差し出す。ネギはややあつてその手に己の掌を重ねると、しっかりと頷いた。

「…解りました。正直何の当ても無い話でしたので、凧さんが協力してくれるなら、此方からお願ひしたい位です。宜しくお願ひします、凧さん!!?」

「おう、こつちこそ宜しくなネギ」

一度固くその小さな手を握り返してから凧がその手を放し、お互いに笑い合う。

「…じゃあ、凧さんすいません。僕はそろそろ教師の仕事が……」

「おう、朝時間無いって時に悪かったな」

ぺこりと頭を下げて学校へ向かつて行ったネギを見送ってから、凧は些か力が入っていた為に固まった肩を解しつつ、踵を返した。

「……さーて、正直行く気はしねえが、一先ず学校行くか。……聞いた話じゃ、どうせあの娘…じゃねえ超歳上なのかそいうえば?……まあ兎に角学校から下校時間までは出れねえらしいしな」

これからの事に対して思案を巡らせる凧は、最後まで傍らの茂みの奥から微かに覗く鈴付きのツイントールと金髪のロングヘアーに気付く事は無かった。

時間は少し遡り、凧が校門前でネギを捕獲して公園へと向かう光景を2-Aクラス委員長あやかが目撃した点から始まる。

朝、校舎へと歩むあやかの心は躍っていた、子供好きなあやかの性へ…もとい感性のストライクゾーンと真ん中を撃ち抜いて来る様なクラスの新担任、ネギの存在によって。

……ああつ何と可愛らしくも礼儀正しい、素敵な少年なのでしょう

か、ネギ先生は!!? 勿論高畑先生に何か不満があった訳ではありませんが、あの様な愛らしい存在と共に学び舎で過ごせるなど、これはこの雪広 あやかかの全身全霊を込めてネギ先生を盛り立てて行けという神の啓示に違いありません!!? 漲って参りましたわああああああつ!!?!!?」

「:朝から何トリップしてる訳? キモいわよいいんちよ?」  
「はっ!」

背後から掛けられた冷めに冷め切った明日菜の声に、あやかは何時の間にか胸の内に溢れる想いが口から迸っていた事を自覚した。

「どーせあれでしょ? 何故か高畑先生差し置いて担任に納まつちやつたあのガキンチョに対して良からぬ妄想でも焚き付けてたって所?」

「:明日菜さん、貴女のその言い掛かりは私に対してもネギ先生に対しても失礼ですわよ?」

かなり凶星に近い所を突かれて焦る内心を抑え、あやかは目尻を吊り上げて反論に入った。負けじと明日菜も口角泡が飛びかねない勢いで言葉を返し、二人は知り合ってからもう幾百回目になるかわからない喧嘩の体勢に入った。

「なーにスカしてんのよすっかり聞こえてたのよ漲る女子中生! 道の真ん中でクネクネと奇行晒しといて今更誤魔化せるとでも思ってるの!」

「あーもう人の行いや趣味嗜好にまでギャンギャンと五月蠅いお猿さんですわねこのガサツ女は! 貴方こそ愛しの高畑先生が担任で無くなってしまったからといってネギ先生にキツく当って自分の器が小さいとは思わないんですの! 今私に小姑の如く口を出しているのだったって単なる腹いせ紛れの八つ当たりなのでなくて!」

「なっ……!?! 言うに事欠いてほざいたわね自分の事棚に上げて!!?」  
「あーら野蛮なお猿さんのお猿さん語は何を言っているのか寡聞にして聞き取れませんわ〜!」

見る間にヒートアップして行き、何時もの如く取っ組み合いに発展するかと思われた二人の争いは、ある意味事の元凶であるネギの登場によって中断される。

「いーわよそこまで言うんなら今日こそ白黒着けて……あれ?」

「上等ですわ売られた喧嘩は……? どうしたんですの明日菜さん?」

唐突にガクリとテンションを落とし、あやかからあさつての方向へ首を向けて驚いた様に見開く明日菜の様子に、あやかと一旦矛を収めて明日菜の見ている方向を向く。

「……あれはネギ先生……と、どなた……!」

「あれ、いいんちよ聞いてないわけ噂? あたしはちよつと話したけど、何だかあのガキンチョの親父さんだか何だか、つて人よ」

昨日の今日、ましてや学校にすらまだ顔を出してはいなかった早朝故に、風が半ば拉致される様に高畑に連れて行かれたその時点から情報ストップしている明日菜は、後ろに戸惑った表情のネギを連れて足早に道路を歩く風についてあやかにそう説明した。

「なんですつて、ネギ先生のお父様?! 何故それを早く言わないんですか明日菜さん!!?」

「あんた今無茶苦茶言ってる自覚ある?……大体父親かどうかは解んないのよあの男自分じゃ否定してたし。改めて見れば父親にしちや若過ぎる気もするしね……」

鼻息を荒げていきり立つあやかに半眼で返しつつ、明日菜は風の何やら険しい横顔を見やる。

「……にしても何かどつかで「父親である事を否定!」つ、つまり彼の方は自らを父と慕うネギ先生に対して無情にも関係を否定して素気無く扱っているという事ですか?!」……え、ええと」

クワツ!!?と目を皿の様に見開き、全身から怪気炎を上げながら明日菜へ詰め寄るあやかの気迫に明日菜は風の姿を見て浮かび上がり掛けた何かの頭からすつ飛び、タジタジに一步二歩と退がりながら何とかあやかを落ち着けんと言葉を紡ぐ。

「……ん、ん、いや何て言うか……あたしが見聞きしてた感じだとそんな風だけど本人は真剣に違うって言ってたし、なんかそれが嘘っぽくも無い感じだったし……高畑先生が連れていったから少なくとも本気で無関係って事は無いとおもうんだけど……」

「ああつ! 何て可哀想に、ネギ先生!!? あの様な幼い身の上にして教

職に赴いている事から何か止ん事無い訳のある身だとは薄々感じて  
いましたが……!!? あのお父上の制服は麻帆良男子高校のもの! つ  
まり高校生にして子を持つ身になってしまった彼の方は無情にもネ  
ギ先生とお母上を振り切って……ああ! ならばネギ先生はひよつと  
して麻帆良に住まうお父上を追って此処へ!」

「いやちよつと妄想捗り過ぎでしよいいんちよ……まあ正直似た様な  
感じの想像はしてたけど……」

「こうしてはいられませんわ!!? どう見ても含んだ所のあるお父上の  
あの表情!!? ネギ先生が何をされるか解ったものではありません、追  
いかけますわよ明日菜さん!!?」

「ええ!? ちよつといいんちよ、あたし小テストがあるからって久々に  
早めに学校へ……」

「つべこべ言っている場合ですか!!?」

「いやだから……っ!」

「……くっ! この距離では何が何やら判りませんわ……!!?」

「だから止めろって言ったんじゃない、こんな馬鹿な真似はつて聞き  
なさいよ馬鹿いいんちよ!!?」

結局引き摺られる様にしてあやかに引き立てられた明日菜は、公園  
のブランコからやや離れた茂みの中にあやかと肩を並べて監視とい  
う名の覗きの真似事をやらかしていた。

あやかは頬に枝葉が突き刺さりかねない勢いで頭をギリギリまで  
出して聞き耳を立てるが、元々風とネギもとりわけ大声で話している  
訳でも無いので、ブランコから5m以上も離れた位置からあやかの聴  
力では話を聞き取る事は出来なかった。

「明日菜さん、貴女の唯一の取り柄であるその野生児並の身体能力で  
何とか話を聞き取れませんか?」

「あんた勝手に連れて来といてその物言い、いい加減引っ叩くわよ?  
……たく!!?」

明日菜は剣呑な目付きであやかを睨み付けるが、こうなれば乗り掛  
かった船と悪態を吐きながらも耳を澄ませる。

「……んん？……ネギ……に逢いたい……ろ？」

「……逢いたい？」

思わず疑問の声を上げるあやかを手で制止して、明日菜は聞き取れる単語を口に出していく。

「……見付けた……殺し？……抑えて……息子に免じて？……ネギ……知つての通り……親父……お前や高畑……いざこざ……所為……起こった？……お前……別れた……面倒臭い事態……巻き込まれて？……親父……麻帆良……やらかして？……んん……？」

「あ、明日菜さん……！」

断片的に言葉を拾っていった明日菜は会話がひと段落した所で眉根を寄せて呟きを洩らし、傍らで聞いていたあやかは俄かに緊迫した表情で話し掛ける。

「何やら不穏な会話じゃありませんこと？」

「みたいねえ……殺したとか別れたとか……ちよつと待つて？」

再び会話が始まり、明日菜は再び耳をそば立てる。

「……お前……会つてみたい？……文句を言つて……ネギ……他に……やる事？……俺……手伝わせ？……探す……情報……解る……つ！」

尚も不穏な断片を耳で拾っていた明日菜は、徐にブランコから立ち上がった風がネギへと頭を下げたのを見て目を見開く。

「……頭を下げて……何を謝つて……」

「……わかんないけど……なんか聞いた限りじゃそれこそ生き別れた親子みたいな……待つて……筋は通さねえと？……俺とお前は……間柄……があつて……他人とは思わ？……今の所……俺とお前……他人だ？」

「……っ!!？……ね、ネギ先生が頷いて……!？」

何やら真剣な表情で風の言った言葉に、傍目にも暗い表情でネギが頷いたのを目撃し、あやかの顔が青褪める。

その後二人が見ている中、苦笑を浮かべた風がネギの頭を撫で、先程よりも柔らかい表情で何かを伝えていた。



「……何か…あの人はあのガキンチョを嫌いじゃ無い、けどくさだからそれは割り切つて仲良くやっていこう……みたいな会話してた、わねえ……………」

「……あのお父上はネギ先生を嫌っていない……それでも今迄別れていた……う……………まさか!？」

あやかは何事かに思い至つてガバリと伏せていた顔を上げると、猛然と明日菜へ捲し立て始める。

「これまでの会話の断片から判断すると、あのお父上はネギ先生のお母様である伴侶の方と険悪になつて別れられたのでは……!？」

「え?離婚したつてこと?……あーあのガキンチョに逢いたいとか何とか聞いてたのはそれで!!?」

「そうです!!?……口ぶりからしてネギ先生もお母様には随分と会つてはいない様子、恐らく御別れになつた後にお父上はそれまでの生活に嫌気がさして、ネギ先生を御親戚か何処かに預けられて学生生活を送られていたのでは!?!そして成長されたネギ先生が唯一居所の解つているお父上の元へ逢いに来た、と……」

「いきなりの遭遇で心の準備が出来ていなかったからあたしが見てた対面の時は関係を否定したけど、時間を置いて親として接しようと思ひ改まったから今こうして話をしに来て、お母さんに逢いたいとかとか放つといつて悪かつたつて謝つたりとか今後は仲良くやっていこうとか言っている、つてこと……?」

「恐らくは……!!?」

辻褄は合うかもしれないわね、と唸る明日菜を他所に、あやかは目を潤ませながら天を振り仰いで手を組み、感極まつた様子ながら器用に小声で言葉を放つ。

「ああ、何て悲しい話なのでしょう!正直あの天使の如く可愛らしいネギ先生を子として認知しないなど、天に代わつて成敗を下し兼ねない気持ちでしたが……!!?色々と事情がありましたのでしよう、葛藤を重ねながらも親子として再び歩んで行こうというその決意は賞賛に値しますわ!!?それにしてもネギ先生がそれ程にお辛い想いをされて過ごしていたとは……!この雪広 あやか、全身全霊を以つ

てネギ先生の悲しみを癒やして差し上げる為に今後行動する事を此処に誓いますわよ、明日菜さん!!?」

「あーはいはい、好きにしなさいよこのシヨタコ……待った、なんかおかしいと思ったらあのガキンチョ確か10歳よね?あの人高校生でしょ何歳で子ども産ませてんのよやっぱりあり得……」

「こうしてはいられませんわ、行きますわよ明日菜さん!!?ネギ先生を早速教室で温かくお出迎えしなければ!!?」

「ってちよつと、だから人の話聞きなさいよいいんちよ!!?」

こうして鼻息も荒くクラスでネギの境遇(推測)を語ったあやかによって、2-Aでは凧とネギは訳ありながらも実の親子であると認識された。

更に噂好きの面々と麻帆良のパパラッチ、報道部所属朝倉 和美の手によってこの話は学園都市全体に拡散すると思われる。

「ネギ先生!お父様との関係改善おめでとうございます!!?この雪広あやか、ネギ先生がこのままお父様との絆を育める様全力でサポートをしていく所存ですわ!!?」

「え、え……えええええええつ!」

「ツクシヨン!!?……糞が何か妙な噂されてる気がすんぜ」

凧はブルリと背筋を走った何とも言えない悪寒に身を震わせながら、凧は教室内から窓の外を見やってひとりごちる。

「……郊外のログハウスつつつたか。顔出してみつかな、早速よ……」

## 5話 やらかした青年は

「……んーだよ風っちは風の如く外へ飛び出してきやがって。折角先頃入手したばっかの風きゅんんバツイチ疑惑!!別れた女とのよりを戻せるか否か!?!: : : なゴシツプネタがマジなのかを面白可笑しく聞き出してやろうと思っただのによろ」

「下世話な真似は止めろ阿呆が。からかわれる側は軽拳に囃し立てる側が想像も付かぬ程に気を病むものだ」

「まあ興味が無いか? つつたら否だけどな。中村と良い勝負出来る漢が俺等高校二年の歳で妻子持ち疑惑だ、事情云々では力になってやりてえわな漢としてよ」

「ま、下手に囃すと碌な事にならないってのは大豪院に同意だね。……所で春園君はあんなに急いで何処行っただの中村?」

「んあ? まあ詳しくは教えてくんなかったけどこんがらがったアレコレスツキリさせに行く、つつーんだからあれだろ、エヴァたんのここだべあのエターナルロリータ」

「……ああ、昨日超包子チャオバオズで春園を投げ飛ばした挙げ句に泣いて走り去ったという話だったか? 古クが朝の対練で喧しかったが……」

「春園の野郎がそれを追っかけてってその後の経緯は不明だろ? まあそれしかねえわな有りそうなのは」

「……ん、あれ? 中村の今し方仕入れた噂と整合するとその別れた奥さんがエヴァンジェリンさん? になるんだけど……」

「いや流石に無えべやあのロリータ中3……んーでもあのロリっ娘確か数年前から見た目変わって無んじゃね、って話があるしこの中村様の目を以てしてもスリーサイズに変化はmm単位で無いんだよなあ。案外歳誤魔化して中学校に居るだけの幼児体型な成人女アダルトの可能性が!?!」

「お前の変態的視点と頭の悪い考察はどうでもいいがまあ、噂の元がそのエヴァ何とか、って女子なのかもしれないねえのは確かなのか?」  
「詮索は止めろ豪徳寺。下衆の勘繰りは相手のみならず己の品位をも貶めるぞ」

「ま、気にはなるよねえ折角色んな意味で仲良くしたくなってる転校生の話だし……いい加減な話が聞きたく無いなら報道部部长の喧囂にでも聞いてみる？」

「お、いいんじゃないやね山ちゃん。んでもって凧つちにはあつちが聞いて答えてくれるまで問い詰め口出し手出し無用、って事でよ」

「あのパラッチ集団がまともな形の情報を伝えてくれるものか、阿呆らしい……」

「いいんじゃないやねえか手合わせと修行ばつかじや暇だしなあ」

「うし決まりー。んじやたつたか行こうぜてめえら」

「こつちが新たな噂ゴシップの拡散元にならない様に話の持って行き方には注意しようね？」

「当然の配慮ではあるが言葉にするな山下、フラグが立つ」

〜凧の転校初日、放課後に於ける武道馬鹿達の会話〜

「……それで？何をしに来た、貴様は」

「こんな事は言いたか無えけど紛らわしい事情があつたにしても非があるのはそつちだろうが。その物言いは流石に無いと思わねえかよ？」

麻帆良の都市部から離れた閑静な一角にある小さなログハウス。

愛らしいぬいぐるみや精巧且つ美麗な愛玩人形ビスクドールに囲まれたファンシーなリビングにてテーブルを挟み、凧とエヴァンジェリンは向かい合っていた。

善は急げの精神かはたまた嫌な事は早く終わらせたい という心境か。

初顔合わせをしたクラスメイト達との交流もそこそこに（中村を初めとして濃い面子が大勢いた）凧は学校を後にし、エヴァンジェリンが住んでいると高畑から聞いた郊外のログハウスへと続く細道前に陣取ってエヴァンジェリンを待ち伏せた。

『…………何の用だ?』

『あれ、用が無けりやあ来ちやいけなかつたかね?…………とまあ冗談はさて置き、お招きしてくれんかね吸血鬼のお嬢様。一応事情は聞いちまったんでよ、話があるんだわアンタに』

風の言葉にエヴァンジェリンは目を細めた後に黙って顎を口グハウスへしゃくり、風を招き入れた後に傍らの茶々丸に紅茶を入れさせ、現在に至る。

…………まあお世辞にも友好的では無えわなあ、色々気不味いにも程がある出会いと別れと来たもんだ。どうやって話切り出すかねえ……………?

風は己に非が殆ど無いという自負から謙った態度を良しとせず、不敵に言葉を返しつつも内心で困り果てていると、エヴァンジェリンがふと硬く張り詰めさせていた表情を苦笑地味た弧を口元に描かせて崩し、風に向かって頭を下げた。

『…………そうだな、今の私は礼儀知らずにも程がある様だ。お前には詰まらん勘違いから多大な迷惑を掛けた、この通り謝罪しよう。すまなかつた』

『……………おお?……………』

その背筋のきちんと伸びている凜、とした姿勢に於いての真っ直ぐな謝罪に、どうあがいても話が拗れる、と暗澹とした心持ちでいた風が驚く。

『…………なんだ、随分殊勝じゃないかよアンタ。てつきり俺は貴様に下げる頭など持たんわ紛らわしい面をした苛つく人間風情が、とかそういう傲岸不遜の化身な魔王様的対応を予想してたぜ?』

「文句を言う資格は今の私には無いがあまり私を安く見るなよ小僧。とうの昔に明るい陽の元を歩めなくなった汚れた身の上ではあるが、恩を仇で、義理に不義理を返すような畜生道を信条に置いているつもりも無い。非の無い貴様に誤解と八つ当たりで危害を加えておきながら恥ずかし気もなく偉そうな口を叩けるか」

無様な話だ、とエヴァンジェリンは己を嗤い、向かいの風へとあらためて視線を向ける。

「…故に問わせて貰うぞ小僧。貴様は非礼の償いとして私に何を望む？気が収まらぬというなら何度でも頭を下げよう、詫びを形として欲するのならそれなりに長生きをしている身だ、金銀財宝の類いならば望むだけの財貨をくれてやる」

言いながらもエヴァンジェリンは表情に喜色も欲も浮かべる様子の無い風の変わらぬ佇まいに苦笑を浮かべ、言葉を締め括る。

「…最も貴様はそんなものを有難がる俗人にも見えんがなあ小僧？格別顔に怒りの色も見えん。だからこそ非礼は承知の上ながら今一度問わせて貰おう…何をしに来た、貴様は？」

「……………あ……………」

エヴァンジェリンの問いに風は視線を逸らしてから彷徨わせ、困った様に唸り声を洩らしたが、

「……………ま、あれか。ウダウダ御託並べてもしゃあねえから単刀直入に切り出させて貰うわ」

と、膝を一つ叩いてエヴァンジェリンへと視線を戻し、あつけらかなとその言葉を告げた。

「あんたが待つてる男だの封印だのってゴタゴタした諸事情の問題解決に対してよ、俺が何か力になれる事はないか？」

「……………、……………何……………」

風の発した言葉の内容が余程に予想の遥か彼方にあつたからか。

一瞬目を丸くして呆けた様に外見年齢相応の何処かあどけない表情になったエヴァンジェリンだが、暫しして眉間に皺を寄せた顔となり風へと問い返す。

「……………どういう意味だ、小僧？」

「だからよ、あんたの力になれねえかって訊いてんだけどよ俺は」

なんか出来る事は無えか？と威圧感を増したエヴァンジェリンの様子にも怯まず、風は再度問いを放った。

「まああんたからすりゃ面が自分の訳ありと似てるってだけの単なる

男子高校生が何言ってるんだ、って思ってるのかもしれねえけどよ、こ  
う見えても俺は色々……」

「そこまでにしておけ」

静かに、されど有無を言わせぬ何かを滲ませた調子の一声で風  
の言葉を遮ったエヴァンジェリンは、何時の間にやら険しさすらも抜  
け落ちた能面の様な無表情で風へ告げる。

「貴様は純粹に善意から申し出ているのだろう、昨夜の対応といい、随  
分なお人好しなのだろうさ。頭を下げる相手に無く下げさせる相手  
にそんな事を言う気概自体は嫌いじゃあない……だかなあ、小僧」

エヴァンジェリンは微かに目を見開き、風を眼光で射竦めなが  
ら更なる言葉を紡ぐ。

「私の様な相手に下手な同情や憐憫から手を差し伸べるのは止めてお  
け。年経ているだけに誇りが高いんだよ、長命種の多くはな。私は全  
うに人生を歩んでいない分捻くれていてなあ、憐れまれるのが大嫌い  
なんだよ。私は私なりに信念を通して結果として今此処にこうして  
居る。端から見て悲惨だろうが滑稽だろうが、私は少なからず納得を  
経て、いる」

チリ、と風の顔を刹那、灼ける様な圧力が叩いた。エヴァン  
ジェリンから洩れ出た殺気とも怒気とも似つかない、気迫にも似た何  
かであった。

「先日の無礼に無礼を重ねてしまいが許して貰いたい、私にとっては  
譲れん矜持の問題でな。……なあ小僧、たかだか昨日今日に話を赤の  
他人から聞き齧っただけの貴様がズカズカと土足で踏み入れられる  
程に私は安くはないつもりだ。悪い事は言わん、先の言葉は取り消せ  
……私もこれ以上に非を重ねたくは無いんだよ」

何も知らないガキが同情なんて安い動機で首を突っ込むな、と  
言外にエヴァンジェリンは風に告げていた。

「……………」

エヴァンジェリンからののはつきりとした拒絶を受けて、風は静  
かに両の眼を閉じた。強い視線を飛ばして来るエヴァンジェリンか

らの無言の催促に暫しの間を置いて目を見開いた凧は、しっかりと目を合わせてはつきり告げた。

「撤回は出来ねえ。あんたに俺の思惑が誤解されてっからだ」

「……………小僧……………」

「まずその小僧呼ばわりを止めろや。俺は昨日、あんたに名を告げただぜエヴァンジェリンさんよ」

表情を歪めて何事かを言い掛けたエヴァンジェリンを、今度は凧が強い調子で遮った。

「俺に自分を安く見んなと言つときながら、他人を安く見てんのはあんたも同じじゃねえかよ。俺があんたの事を、好いた男に放っておかれて何て憐れなんだ、ああ可哀想に可哀想に……………なんて考えてると決め付けた物言いだぜあんたの口振りは！」

凧は眦を吊り上げ、エヴァンジェリンに言い放つ。

「何も知らねえガキだ、何の関係も無い赤の他人だ。ああその通りだぜ反論の余地はねえな。信用出来ねえ、役に立たねえって理由だけで突つ撥ねんなら俺は何も言わねえさ。でも俺の心情を、動機を下衆な代物に貶めて見られてんなら黙って退けやしねえんだよ。俺はあんなの事情を聞いて、不憫に思った。だから何か力になりたくなくなった、そんなだけだ！勝手に人を上から目線の嫌な奴にしてくれてんじゃねえよ!!」

「……………不憫に思った、だど？それを憐れんでいると言うんだろうが、ガキい!!」

エヴァンジェリンは怒りを浮かべる凧に同調するかの様に、遂に顔へ明確な怒りを浮かべて凧を一喝した。その細い身体から濃密な圧プレッシャー力と共に感情の昂りから制御を失った魔力が突風の様に物理的な力となって凧の全身を叩く。

凧は心身両面から押し寄せる凄まじい重圧に顔を歪め、微かな恐怖を顔に浮かべる。凧とて何も知らなかった昨日迄とは違い、エヴァンジェリンがどのような存在であるかは高畑から訊いて理解していた。吸血鬼という人の理を離れた化生の存在であり、その力は一人殺すなど造作もない事である。そんなエヴァンジェリンを前に



して態々感情を逆撫でする様な真似をしている事に躊躇いが無かった訳は無く、無論の事凧は命は惜しい。

「……………でも、放つとけなかつたんだよ、なあ……………しようが、ねえわなあ……………!!」

凧は微かに震える身体を内心で一喝し、俯き掛けた顔をしっかりとエヴァンジェリンに向け直して言葉を返した。

「違えだろー！単語の意味合いだけで話をしてんじゃねえだろが!!勝手に人の言葉を悪い様にてめえが取っているだけだろがよ!!てめえの境遇は一片の余地無く徹頭徹尾てめえの自業自得で同情される謂れは無えのかよ?!違えだろが!!てめえに非が無え訳じゃなくとも、少なくともてめえが今こうしてんのは、あんたが思わず面拝んだだけで投げ飛ばしちまう位に鬱憤溜まつてる、傍迷惑にも俺と面が同じな糞つたれた野郎の所為だろがよ!!」

「……………!!」

凧の怒号に、エヴァンジェリンが言葉を詰まらせる。

「酷え話だと、俺は眼鏡のおっさんから聞いてそう思ったよ!あんまりな話だつて思った!!何かおかしな事かよそれは?!可哀想な奴扱いはされたくねえつて気持ちは理解わかるよ!俺が同じ立場でも勝手に人の生き様の価値を決め付けるような輩はぶつ殺したくならあ!!……………でも俺は、あんたを哀れな女だつて、そう見下してるつもりは無えんだよ」

不意に凧は語調を落とし、エヴァンジェリンをしかと見据えて噛み締める様に言葉を紡ぐ。

「純粹に貴女の力になりたい……………なんて、言葉にすりやあ安っぽいけどよ。偽り無い本心のつもりだよ、それがな。困ってるから手を貸したい、これはそんなにおかしな話かよ?」

「……………何故だ?」

凧による心情の吐露に、エヴァンジェリンは暫しの沈黙を挟んだ後、心無し圧力を緩めて尋ねた。

「何故お前はそうまでして私に協力しようとする?お前は迷惑を掛けたのでなく掛けられた側だ、私は未だ貴様に何も償ってはいない。ま

さか私に惚れた等と言い出しはすまい？……貴様の考えが理解出来ん」

「…ああ、まあ単純な話だよ。こんなこと言うとあんたはまた怒るかもしれないねえけどな」

凧は面映ゆ気な表情を浮かべた後、エヴァンジェリンに理由<sup>わけ</sup>を告げた。

「あんたはさ、昨日泣いたじゃねえかよ。俺の前でさ」

「……………ああ、思い出したくもない醜態だが、その通りだな」

それがどうした、と再び気分を害してか表情を険しくするエヴァンジェリンへ気を悪くしないでくれ、と軽く頭を下げてから、凧は言葉が続ける。

「あんたがああして想いを吐き出したかったのはさ、ナギ・スプリングフィールドつつう俺の知らないそっくりさんにてあって、俺じゃあない。そんな事は重々承知の上だよ」

でもさ、と、凧はエヴァンジェリンの目を見ながらその言葉を告げた。

「あんたが待つてたのは俺じゃ無くとも、あんたの悲鳴<sup>なげき</sup>を聞きちまつたのは俺なんだよ」

「……………!!」

エヴァンジェリンは、凧のその台詞に思わず目を見開いた。

「気分を悪くしないでくれ。決して悪い意味で言う訳じゃない。……俺はさ、目の前で泣いてるあんたを見て、こんなに激しく、悲しそうに泣いてる女は見たことが無いって、ただそう思った。俺はナギ・スプリングフィールドじゃ無いからあんたに謝る事も労ることも慰めることも出来ねえ。ただ俺は春園 凧として、あんたをどうにか助けたいと、そう思った。同情も憐憫が欠片も無いとは言わねえよ。ただ、俺のこの心は、そんな偉そうな代物だけじゃ無いって、理解<sup>わか</sup>って貰いたい。俺は魔法なんてもんまるで知らなかったド素人な上に、つい先日田舎から出てきたばかりの世間知らずなガキだ。それでも、生

半可な覚悟でこんな事言い出したつもりは無えんだ。どうか真剣に答えてくれ、俺があんたに何か、してやれる事は無いのか、エヴァンジェリンさん？」

「……………」

短くない時間を、黙ったまま風と睨み付ける様な視線の強さのままに目を合わせていたエヴァンジェリンは、ふと目を閉じる。

僅かな時間の後に瞼を開いたエヴァンジェリンは、風を幾分柔らかくなつた視線で見据えつつ、はつきりと言ひ放つた。

「春園 風。お前の手を借りる様な事は何も無い。折角の申し出だが、断らせて貰おう」

「……………そうか」

「ああ。お前の言い分は理解した。お前という人間を貶めていた事は謝罪する。その上で、素人のお前に出来る事は何も無い。…その気持ちだけ、頂いておこう」

痒い台詞だ、と笑うエヴァンジェリンの姿に、こりやもう本当に俺が出来る事は無いな、と風は悟る。

「…解つた。手間掛けたなエヴァンジェリンさんよ。お茶御馳走さん、帰るわ俺」

「こちらの台詞だよ被害者。非礼を重ねたな、詫びは何れ必ずや入れよう」

いいつての、と立ち上がりこちらを見送ろうとしているエヴァンジェリンに苦笑を返しつつ、風は暗澹たる思いに内心溜め息を吐く。

……まあ都合の良いヒーローよろしく颯爽と助けになれるなんて思っちゃいなかったが現実つてのはやっぱ厳しいモンだな。妖精だか精霊だか知らねえが、ンなもんの概念も良くは知らねえ俺が助けに、なんてのは虫の良い話なんだろうけどよ……………」

それでも歯痒いモンだ、と近づくエヴァンジェリンをなんとは無しにボンヤリと見つめていた風は、直後に思わず声を洩らした。

「……………あ……………」

「あん……………」

呆然と目を見開いて己を見つめてくる風に怪訝そうに疑問の声を返したエヴァンジェリンだが、風からの反応は無い。

「どうした貴様……?」

「……………いやストップ。ちよつと悪いが黙っててくれ。……………妖精だか精霊だか知らんが、何かあんたに纏わってる小人見てえなのが今し方見えて、何か話し掛けて来てんだよ……………」

「……………はああ!」

時間は僅かに遡り、風がエヴァンジェリンの肩の辺りにそれを発見した時点に戻る。

全体として霞んだ様に半透明な、掌程の大きさしかない人間の子供を2〜3頭身程にデフォルメした様な、何処かファンシーな印象を受ける貫頭衣の様なものを纏う小人は、己に視線を向けている風に気付いて何処かポヤン、とした笑顔を返しながら言葉を紡いだ。

『主様、達私に新しくご命々?』

「……………あんだって?……………」

その小人が発した、意味が通っている様で通っていない言葉に風は不審気なエヴァンジェリンを宥めつつ尋ね返す。

『主様、達私に新しくご命々?』

「……………?……………」

しかし返ってくる言葉に変わり無く、風はクエスチョン? マークを頭に幾つも浮かべながらも小人の台詞を脳内で咀嚼し、意味を解釈する。

……………主様ってのは多分俺?で、たちわたし……………いや文脈的に自分の事言ってるから、達私、私達?なんでひっくり返ってるだ?……………っていうか達って一人?しか居ねえじゃねえか……………!?

ふと疑問に思い、エヴァンジェリンに纏わる小人に再度目を向けた風は驚きの余り仰け反って数歩後退る。

『『主様、達私に新しくご命々?』』』

樹の蜜に群がる蜂の如く、何時の間にか数十に数を増やしていた小人達が一齐に風へと同じ台詞を紡いだからだ。

「……………おい、おかしくなったか、春園 凧？」

「……………いや、いやいや……………つかあんだ聞こえても見えてもいねえの？」

「お前が先程ほざいた妖精云々か？見えも聞こえもせんわ。大体そんなものが居たとして、私に見えず素人のお前にだけ見える道理を言ってみろ」

「……………だわなあ……………」

至極真つ当なエヴァンジェリンの言い分に頷きつつも、到底幻覚とは思えない程にはつきりと見えている小人達を凧はうそ寒気に見やり暫し考えてから質問を小人達にぶつける。

「お前等は何モンだ？」

『達私？』

『精霊』

『そう、霊精』

『主様と約契した精霊』

「……………主様で……………いや、この際いいとして何の精霊だよ？」

相変わらず所々で言葉がバグった様におかしくなっている小人達へ尚も質問をぶつける凧。

『何の霊精？』

『何の？』

『何の？』

『制強の精霊』

『学校へか行せる霊精』

『行かせるの校学を強制の精霊』

「……………ちよつと待て、えーと……………んん!？」

懸命に小人達の言葉の意味を繋ぎ合わせていた凧は、不意に小人達の正体を悟った。

……………こいつら、まさか登校地獄？だか何とかつつう、聞くだに阿呆臭え響きのこの女に掛かっている呪い？の精霊、って奴なのか……………？

その意味と、それが自分にだけ見えている、という事実を暫く

考えていた凧は臆て顔を上げ、胡乱な表情で不審気な視線を突き刺してくるエヴァンジェリンに対して断りに行った。

「…エヴァンジェリンさんよ、暫く俺がぶつくさ何かを言っても、何もしないでじっとしててくんねえか？」

「…………いや貴様何を…」

「頼む、それを俺への詫びって事にしてくれていいからよ」

ピシヤリと手を合わせてそう述べる凧を理解不能という顔で見上げていたエヴァンジェリンだが、

「…………まあいい、借りのある身だ。付き合つてやるが…………本当に何をしている貴様？」

「…………ん、上手くすれば、あんたにとって良いこと、かな？…………」

尚も怪訝な表情のエヴァンジェリンをとりあえず椅子へと座らせ、凧は小人改め精霊達との交信を再開する。

「あー精霊達精霊達。俺を主と認識してんなら俺のお願いを聞いてくれるか？」

『お願い？』

『願おい？』

『お願いお願い…………ご命々』

『ご命令、ご命々』

『聞く』

『聞く聞く』

「なあ何かお前等バグってね？それに命令じゃねえよ、お願いって……………まあいいや、ほら。お前等が取り憑いて…いや、契約つつかか？してる女の子な、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルって奴。そいつにやってる仕事な、もう止めにしてくれねえか？」

凧の言葉に精霊達は顔を見合わせ、口々に言葉を返す。

『主様の…ご命々？』

『女の子を終わらせる事仕で』

『子の女を契約で憑り取いて？』

「全然違えよ。つうかご命令な、命々じゃ無くて。もつとシンプルに言うとは…………あー、この女に対しての仕事は終わり、解散しろ」

『ご命令』

『ご命々?』

『ご命令ご命令』

『仕事を女の子に散解?』

「違う、ご命令、女の子に対する仕事終了、解散しろ」

『ご命令?』

『女の子が了終で解散?』

「だからなんでバグるんだよお前等!!」

それから暫く、何かしら意味の通らない文章を口にする精霊達と、それを根気良く訂正していく凧という構図がエヴァンジェリンの頭上で巻き起こる。

「……おい、まだ終らんのか?」

エヴァンジェリンとしては、凧に何かが見えているとして言葉からのやり取りに到底意味があるとは思えない為に、半ば呆れた様に茶番としか思えないやり取りに口を挟むが、

「もう少しだけ時間をくれ!この物分かりの悪いチビ共に意地でも正しい言葉を言わしてやるあ!!」

変なスイッチの入ってしまったらしい凧は最早当初の目的を半ば忘れてそう吼える。

「ご命令!この女への契約終了、解散!!」

『ご命令』』』

幾度目かのやり取りの果て、精霊達が唱和する。

『少女への契約を終了する』

『私達は解散する』

『ご契約を終了する』』』

「いよーしっ!!漸くだ良く言えたぞー!」

偉い偉い、とご満悦に幼児を褒める様な口振りの凧に呆れ果てたエヴァンジェリンが何事か声を掛けようとした、その瞬間。

『契約の終了を了承した』

『解散』

『解散』

『『『解散くく』』』』

「……………ん？」

「……………あ？」

精霊達が声を揃えて解散の旨を告げ、一斉にその姿を宙に溶けさせたと同時に、エヴァンジェリンの全身から光の帯と無数の大小様々な魔法陣が浮かび上がり、一斉にそれらが弾けて光の残滓となり宙へ散った。

「………………………………………」

海よりも深い沈黙が凧とエヴァンジェリンの周りに漂い、やがてエヴァンジェリンが錆びた扉が軋む様な調子で凧へと問いを放った。

「……………何をした、貴様……………？」

「…………………………登校、地獄……………とやらの……………解除じゃね

……………？」

「………………………………………は…………………………」

エヴァンジェリンは力の無い笑みを浮かべて。

「……………そんな馬鹿な話があるわけ無かろうが阿呆くく!!」

猛然と凧に詰め寄りながらあらん限りの力で叫んだ。

「俺が何だか解る訳無えだろが!!俺はただ精霊っぽいのが見えて何か会話出来たから呪い解けない? って会話してたら何かいきなり……………」  
「訳が解らんわ!!大体貴様ナギで無く凧だろうが、何故契約の精霊が見える!?!」

「だから知らねえよ?!見えたんだからしよーがねえだろが!!」

「マスター!!何事ですか!?!」

ギヤアギヤアと言い争う二人の騒音を聞き付け、エヴァンジェリンの命により退室していた茶々丸が何事かと様子を伺いに来た。

「茶々丸!この紛らわしい面のガキが何やら訳の解らん……………」

「その面倒臭え呼び方止めろや俺は春園な……………つと、おお!?!」

口角泡を飛ばしかねない勢いで混乱しつつ激昂しているエヴァンジェリンに抗議しかけた凧は、唐突に襲って来た脱力感に思わず片膝を付き、頭を押さえる。



「っ!?!おい、どうした貴様!?!」

「いや、何か身体が急にだる……く………おお………」

顔を蒼く染めた凧は、言葉を言い終えない内にぐらりと身体を傾け、意識を失って床に突っ伏した。

「……………!!、茶々丸!!」

「はっ!!」

凧の身体を引き起こしながらのエヴァンジェリンの言葉に茶々丸は素早く応じ、凧の脈拍を計り、瞳孔を確認するなどして、身体状況を確認し始める。

「……やや脈が弱い他は身体に異常はありません、顔色等から判断して貧血に似た症状かと。……マスター………」

「ああ、見て解る程に魔力量が減少している。…症状からして新米魔法使いが一度に魔力を放出し過ぎた事による脱力症状のアレな様だが………」

凧が一先ず急を要する状態で無い事を確認して僅かばかり落ち着きを取り戻したエヴァンジェリンだが、未だに状況は欠片も掴めない。

……………何が、起こった……………!?!

「……茶々丸、一先ずこいつをソファアにでも………」

「お待ち下さい、マスター」

エヴァンジェリンの言葉を遮り、茶々丸は懐で鳴り響く携帯電話（機械音痴のエヴァンジェリンに代わって学園との連絡用のものを茶々丸が所持していた）を取り出して通話状態とする。

「はい、こちら絡線 茶々丸です。お名前と御用件を………」

『……茶々丸君、農じゃ、学園長じゃ。エヴァンジェリンは今側におるかろう?』

「爺い、私も聞いている。何だ?今こっちは立て込んでいるんだよ、手短かに話せ」

スピーカーモードに茶々丸が切り替えた為に流れて来た近右衛門の声に噛み付く様に返すエヴァンジェリン。

近右衛門は電話の向こうで微かに息を吐き、呻く様に言葉を紡

いだ。

『立て込んでいる、は此方の台詞じゃ。……のうエヴァ、此方で観測していた、お主にがんじがらめに被さっていた契約の魔法が先程解除された様なんじゃが……もしやと思いいネギ君の様子を確認したが無事のようにじゃし……何をしたんじゃ、お主?』

「……………」

近右衛門の言葉にエヴァンジェリンは無言のまま天を仰ぎ、時折呻き声を上げながらもまるで眠った様になっている風の顔へと視線を下ろしながら呟く様に返した。

「…………それは私が聞きたいわ、爺い……………」